

君津市九十九坊廃寺址確認調査報告書



千葉県文化歴センター蔵書

研究部

序 文

千葉県下には、国分寺跡をはじめ40箇所にのぼる古代寺院跡の所在が確認されています。これらの寺院跡は、奈良・平安時代における地域の歴史・文化を解明する上で重要な遺跡であります。発掘調査により内容を把握できた例は少ない状況です。

千葉県教育委員会では、県内に所在する古代寺院跡の中で、特に重要性が高くかつ開発の影響を受ける恐れのあるものについて、規模・時代等を明らかにして、その保存策を講ずる資料とする目的で、国庫補助事業として昭和55年度から実態確認調査を実施してきました。

本年度は、君津市内義輪に所存する九十九坊廃寺跡の調査を実施しました。当廃寺跡は、從前から、軒丸瓦（三重圓文縁四葉複弁連蓮文）、軒平瓦（段頭三重弧文）、平瓦（格子目文）等が発見されており、昭和8年には、大場磐雄・内藤政恒・篠崎四郎の三氏によって調査が行なわれ、塔と考えられる基壇跡の検出から、法隆寺式伽藍配置が想定されました。その結果、昭和10年には県の史跡に指定されましたが、その実態はなお不明であり、その解明が望まれておりました。

今回の調査では、塔及び講堂の基壇跡の規模・形状等が明らかになり、又、金堂跡についてもその位置が確認されました。これらの配置から、法隆寺式の伽藍配置であることが確認され、又、瓦等の遺物も大量に出土しており、今後の古代寺院跡の研究にとって、重要な資料を提供することができました。

このたび、その発掘調査成果が調査概報として刊行される運びとなりました。本報告書が学術的な資料としてはもとより、文化財の保護・活用のために広く一般の方々にも利用されることを期待しております。

終りに、調査に当って多大な御協力をいただいた君津市教育委員会を始めとする地元の方々、調査を担当された財団法人千葉県文化財センターの職員及び調査補助員の方々の御苦労に対し、心から感謝の意を表します。

昭和60年3月30日

千葉県教育府文化課長

斎 藤 浩

凡 例

1. 本書は、千葉県教育委員会が実施した古代寺院跡確認調査の第5年次の報告である。
2. 九十九坊廃寺址（遺跡コード225-002）は、千葉県君津市蓑輪191に所在する。
3. 調査は、国庫補助金を得て、千葉県教育委員会が財団法人千葉県文化財センターに委託して実施した。
4. 調査は、昭和59年11月5日から12月24日にかけて実施した。
5. 調査、整理作業および報告書の作成は、森本和男が担当したが、根本弘、永沼律朗、石田広美、矢戸三男、野口行雄、今泉潔、服部哲則、萩原恭一、山田貴久、渡辺智信、鈴木晋二男の御教示を得るところが大きかった。なお、今回の調査については、現地での発掘調査から報告書作成にいたるまで千葉県文化財センターの職員各位から何らかの形で暖かい御援助をいただいた。謹んで謝意を表したい。
6. 調査の実施にあたっては、君津市教育委員会および（財）君津都市文化財センターの関係者から多大な御協力を得るとともに、内蓑輪地区自治会長の影山省三氏をはじめ、下記の方々からは所有地の借用その他様々な点にわたって多大な御援助をたまわった。記して感謝の意を表すものである。
香取基、茅野浩司、石崎弁吉、石橋政治、影山信藏、伊藤藤太郎、根本つや、山九株式会社。
7. 発掘調査や本書をまとめるにあたって、下記の諸兄より種々の御教示、御高配をたまわった。感謝申し上げる。
須田勉、宮本敬一、熊野正也、西山克己。
8. 下記の学生諸君は発掘、整理にあたり、無理無体な要求にも素直に応じ、おおきな貢献をなした。感謝申し上げる。
石坂俊郎、高井佳弘、林直樹。

目 次

| | |
|----------|----|
| I.はじめ | 1 |
| II.調査経過 | 8 |
| III.検出遺構 | 10 |
| IV.出土遺物 | 23 |
| V.まとめ | 26 |

挿 図 目 次

| | |
|------------------------------|----|
| 第1図 九十九坊廃寺址の位置(1/25,000) | 3 |
| 第2図 周辺の地形およびトレンチ設定図(1/1,500) | 9 |
| 第3図 塔平面実測図(1/40) | 11 |
| 第4図 塔基壇東側土層断面図(1/30) | 13 |
| 第5図 講堂基壇平面実測図(北 1/40) | 16 |
| 第6図 講堂基壇平面実測図(南 1/40) | 17 |
| 第7図 講堂基壇平面実測図(西 1/40) | 18 |
| 第8図 講堂基壇南辺平面実測図(1/40) | 18 |
| 第9図 講堂基壇北辺土層断面図(1/30) | 19 |
| 第10図 講堂基壇南辺土層断面図(1/30) | 19 |
| 第11図 講堂基壇西辺土層断面図(その1 1/30) | 19 |
| 第12図 講堂基壇西辺土層断面図(その2 1/30) | 20 |
| 第13図 講堂西側掘立柱建物群(1/100) | 21 |
| 第14図 軒丸瓦 | 24 |
| 第15図 軒平瓦 | 25 |
| 第16図 九十九坊廃寺伽藍想定図(1/1000) | 29 |
| 第17図 法隆寺西院旧伽藍配置図(1/1500) | 30 |
| 第18図 法隆寺式伽藍配置図(畿内周辺 1/1500) | 33 |
| 第19図 法隆寺式伽藍配置図(東国 1/1500) | 34 |
| 第20図 房総地方古代寺院伽藍配置図(1/1500) | 36 |
| 付図 九十九坊廃寺址全測図(1/200) | |

図版目次

- | | | | |
|------|----------------------|-------------------------|-------------------------|
| 図版 1 | 九十九坊廃寺跡航空写真 (1/6500) | 図版 6 | 1. 講堂東寄り瓦出土状態 |
| 図版 2 | 1. 塔発掘前 (北東から) | 2. 講堂基壇北辺土層断面 | |
| | 2. 塔発掘区 (北から) | 3. 講堂基壇西辺土層断面 | |
| | 3. 塔心礎 (西から) | 図版 7 | 1. 講堂西側掘立建物群 (南、西より) |
| 図版 3 | 1. 塔東側基壇土層断面 (東から) | 2. 講堂西側掘立建物群 (西、南より) | |
| | 2. 塔東側基壇土層断面 (部分) | 3. 北西部掘立柱 | |
| | 3. 講堂発掘前 (北から) | 図版 8 | 軒丸瓦 |
| 図版 4 | 1. 講堂基壇 (中央) | 図版 9 | 軒平瓦 |
| | 2. 講堂基壇瓦敷き | | |
| | 3. 講堂基壇 (北) | | |
| 図版 5 | 1. 講堂基壇 (西) | | |
| | 2. 講堂基壇 (南辺) | | |
| | 3. 講堂南寄り瓦出土状態 | | |

I. はじめに

1. 遺跡の位置と環境

九十九坊庵寺址は、君津市内蓑輪191番地に所在する。周辺は大字内蓑輪小字九十九坊台と大字南子安小字九十九坊にわかれる。

君津市は千葉県の中央南寄りに位置する。北は木更津市、西は富津市、南は鶴川市と安房郡、東は夷隅郡と市原市に接している。地勢的には、平野部よりもむしろ山間部の多い地域であり、北西のわずかな範囲で東京湾と接している。

市の東寄りには北に向かって小櫃川が流れ、西寄りには房総丘陵から発する小糸川が西北の方向に流れをすすめ、東京湾にそいでいる。小糸川上流は狭い山間河成沖積地を迂曲蛇行して流れている。小糸川下流一帯には河成、海成の両者からなる混合沖積平野が形成され、その西方には三浦半島に対峙する富津岬が東京湾に突出している。九十九坊庵寺址は小糸川中流域の北側、東から西にのびる丘陵の麓に位置している。

遺跡は国鉄君津駅から東方へ約3.5km離れた、北から南になだらかに傾斜する標高約25mの丘陵地上に立地し、背に山地を負い前面に水田を見渡すという景観を見せている。

旧君津町は、昭和18年に周西村と八重原村が合併し、町制を施行して生まれた。戦後、政府の町村合併促進の気風にそって君津町、貞元村、周南村の3町村が昭和29年に合併し、第2次君津町が発足した。⁽¹⁾その後新日鉄の進出に呼応して昭和45年新たに小糸村、清和村、小櫃村、⁽²⁾上総町と合併が進み、第3次君津町ができ、翌46年に町から市に昇格し、市制を布いた。⁽³⁾ここに君津市が誕生したのである。⁽⁴⁾

内蓑輪という地名が、史上登場するのは近世初頭である。元和6⁽⁵⁾（1620）年に算輪村が内蓑輪、外算輪、法木の3村に分割した。算輪というのはこの3つの村の地形が箕の形をしていたことに由来する。郵岡良弼は『日本地理志料』で『房総志料』を引用し、「三直方=廢、三直村存、按レ圖亘三直、上村、練木、大鷺、外算輪、内算輪、法木、諸邑、稱周東莊、蓋其地也。」と記している。現行流布している『房総志料』にはそのような記事はなく、また、図を付していない。⁽⁶⁾弘化4⁽⁷⁾（1847）年に刊行された鳥海駿車撰『南總郡郷考』には外算輪村、内算輪村の名がみえ、付図の「南總郡郷考国全図略説」には「外ミノワ」、「内ミノワ」の位置が示されている。⁽⁸⁾なお、内蓑輪の小博氏所蔵元禄7年作成の周辺古図があったが、現在行方不明である。

内蓑輪の「蓑」は外算輪の「箕」の字を元来使用していた。ところが元禄年間に九十九坊庵寺址のすぐ南にある鐘ヶ淵（県指定史跡）をめぐる水利権争い以後、内算輪の「箕」は「蓑」とされた。最近また、内蓑輪から内算輪にもどったという。

東京湾にのぞむ小糸川流域平野は面的にはさほど広くない。しかし、古くから人々が住んで

いたらしく、各時代の遺跡が残っている。小糸川上流から中流にかけて両岸の台地および丘陵地上に多くの古墳(群)が点在している。九十九坊廃寺跡の所在する小糸川中流右岸、台地先端部には5世紀前半の道祖神裏古墳(県指定史跡)があり、周辺には上ノ山古墳、宇曾貝古墳群、下新田古墳群、野間木戸古墳、星谷上古墳がある。古墳時代後期初頭の八幡神社古墳(県指定史跡)が南面の小糸川に近接する水田中にある。小糸川下流域の平野部には5世紀の内裏塚古墳(県指定史跡)をはじめ、三条塚古墳、九条塚古墳等の大型の前方後円墳がある。西南のすこしはなれた地点に稻荷山古墳と姫塚古墳があり、内裏塚古墳群を形成している。富津は古くは「古津」と書き、その昔東海から東北へ通ずる要路はこのあたりを通り、一衣帶水の浦賀水道をはさんで、対岸の三浦半島と船で往来していた。大和政権の全国制覇の象徴である日本武尊も、ここをわたって関東東部へ進出した。なお、海をわたる際に暴風雨を鎮めるため、弟橘媛が海に身を投じたという伝説のがこっている。

さて、九十九坊廃寺跡と年代的にちかい古墳は、横穴式石室を有する7世紀代の終末期古墳が考えられる。小糸川上、中流域の終末期古墳の調査例はあまりない。九十九坊廃寺跡の北西2kmの地点に、北子安掘込古墳といつて一辺約11mの7世紀後半から8世紀とされる方墳があつた。この古墳以外にこの地域から、終末期古墳はみつかっていない。下って、下流域の内裏塚古墳群周辺には著名な割見塚古墳や、森山塚古墳が、さらに新羅焼土器を副葬した野々間古墳等があり、その他にも数基数えることができる。これらの古墳はすべて方墳である。ところで、関東地方における前方後円墳の消滅は一般に7世紀半ばの大化改新の頃とされ、それ以降は方墳の発達が顕著となる。また、房総の終末期古墳の方墳の年代は7世紀前葉から8世紀前葉にかけてであり、その分布状況は印旛沼周辺にやや集中し、割見塚古墳は分布の南限にあたる。いずれにせよ、九十九坊廃寺跡の性格を考えるにあたり、これらの終末期古墳は重要な役割をはたすであろう。

小糸川流域の歴史時代集落遺跡の調査例はほとんどない。九十九坊廃寺跡から西方約500mの地点に南子安遺跡がある。この遺跡からは国分期の土師器や吹子、カナクソが出土したといふ。九十九坊廃寺跡との関連性が想定しうるが、残念ながらわずかな資料しか公表されていない。

みのう

九十九坊廃寺跡の東南は三直である。三直という地名は往古より存続し、「倭名類聚抄」には上總國^{すゝみ}周淮郡^{すくい}の8つの郷のうちの1つに數えられている。周淮郡は平安末期には周東郡と周西郡にわかれ、その後江戸初期に再編され、はじめは周集郡とも書かれていた。三直は中世の頃は周東郡に属し、数々の文書に登場する。この三直付近に古代の官道がとおっていた。古墳時代の交通路は相模国の三浦半島から浦賀水道を船で富津にわたり、北上して現在の市原市に入り、それから下絶、常陸へと進んだ。しかし、8世紀に武藏国が東山道から東海道に編入され



第1図 九十九坊廃寺跡の位置 (1/25,000)

ると、以前から開発されていた東京湾岸に沿う道が本格的に利用されはじめた。7世紀から8世紀にかけては、交通の要路としてこの新旧2つの道が併用されていたであろう。「延喜式」に列記された上総国の駅馬設置地点は大前、藤齋、鳩穴、天羽の4カ所であり、伝馬の設置地点は海上、望陥、周准、天羽の4カ所である。⁽¹⁾これらの駅馬、伝馬の設置地点は現在のどのあたりに想定しうるか不明な点がおおい。いずれにせよ、上総国の国府（市原市惣社）から南へ安房国へいたる道は、道中に三直付近をとおったとされている。⁽²⁾九十九坊廃寺跡はかかる交通の要衝に位置していた。

註

- (1) 「角川日本地名大辞典12 千葉県」角川書店 1984年、P. 1023~4
- (2) 千葉県地方課『千葉県町村合併史』下巻 1957年、P. 701~3
- (3) 君津町誌編纂委員会編『千葉県君津郡君津町誌』後編 1973年、P. 507~8
- (4) 千葉県企画部県民課『千葉県古文書目録上総国1』千葉県史料調査報告書2 1979年、P. 255参照
- (5) 小沢治郎左衛門『上総町郷誌』1889年、複刻版、名著出版、P. 302
- (6) 君津町誌編纂委員会編『千葉県君津郡君津町誌』前編 1962年、P. 9。なお山中襄太『地名語源辞典』校倉書房 1968年、P. 337参照
- (7) 京都大学文学部国語学国文学研究室編『倭名類聚抄 外編』臨川書店再版、P. 246
- (8) 中村国香『房総志料』『改訂房総叢書』第3輯
- (9) 鳥海醉車『南総都郷考』1847年、『改訂房総叢書』第4輯、P. 33
- (10) 鳥海醉車（註9）P. 5
- (11) 君津町誌編纂委員会編（註3）P. 313
- (12) 君津市教育委員会、白駒遺跡発掘調査会『白駒遺跡発掘調査報告書』1981年、P. 3~4
- (13) 道祖神裏古墳調査団『道祖神裏古墳調査概報』1976年、P. 5
- (14) 千葉県教育委員会『千葉県の文化財』1980年、P. 374
- (15) 杉山晋作「内裏塚古墳群の再検討 内裏塚古墳の遺物（前）」「史館」第5号 1975年5月、P. 71~79
- (16) 甘粕健「内裏塚古墳群の歴史的意義」「考古学研究」第10巻第3号 1963年12月、P. 13~24。
滝口宏「富津古墳群」「千葉県史料」原始古代編 上総国 1967年、P. 38~52。『二間塚遺跡群確認調査報告書』君津郡文化財センター発掘調査報告書第5集 1984年
- (17) 中村国香（註8）P. 15
- (18) 「日本書紀」卷7 景行天皇40年「国史大系」本前編、P. 215~6。「日本古典文学大系」本上、P. 304~5。「古事紀」中巻「日本古典文学大系」本、P. 214~5。「日本思想

大系」本、P. 182~3

- (19) 君津市教育委員会、北子安掘込古墳発掘調査団『北子安掘込古墳調査概報』1974年
- (20) 滝口宏「富津町飯野古墳群」『千葉県遺跡調査報告』1964年、P. 54~5。中村恵司「房総半島における横穴式石室」1974年『房総古墳論叢』所収、P. 83~4
- (21) 桜山林蔵「森山塚」国学院大学文学部考古学実習報告書第7集 1984年
- (22) 石井則孝「千葉県富津市出土の新羅焼土器」『史館』第8号 1977年3月、P. 74~76。同「富津市上飯野「野々間古墳」の出土遺物について」『史館』第10号 1978年5月、P. 44~56
- (23) 梅沢重昭「古墳の終末」『古代の日本』7関東 角川書店 1970年、P. 186
- (24) 安藤鴻基「房総七世紀史の一姿相」『古代探叢』早稲田大学出版部 1980年、P. 391
- (25) 甘粕健、久保哲三「関東」『日本の考古学』IV 河出書房新社 1966年、P. 486~9
- (26) 野中徹「南子安遺跡」『日本考古学年報』25 1974年、P. 43
- (27) 君津町誌編纂委員会編(註3) P. 41
- (28) 高山寺本は山家、山名、額田、三直、丸田、湯坐、藤部、勝川、の8つの郷をかかげ、那波本はこれに勝部をつけ加えている。京都大学文学部国語学国文学研究室編『倭名類聚抄本文編』臨川書店再版、P. 625, 808
- (29) 「吾妻鏡」卷一、治承4年9月19日条、「国史大系」本第一、P. 46
- (30) 「千葉県地名変遷総覧」第2版 1972年、P. 25
- (31) 足利健亮「東国交通」「日本歴史地理総説」古代編 吉川弘文館 1975年、P. 236~9
- (32) 「延喜式」卷28 「国史大系」本後編、P. 712
- (33) 君津町誌編纂委員会編(註3)、P. 49

2. 研究略史

往古の一時期に衆徒の群れ集いをみせた九十九坊廃寺は、廃墟と化した後、江戸時代になって人々の耳目を引くようになった。近世初頭に鐘ヶ淵(弁財天)から出水する灌漑用水をめぐり、内蓑輪村と外蓑輪村との間で水利権争いが起きた。その判決文である元禄7(1694)年の「上総国周集郡内蓑輪村より同郡外蓑輪村用水論之事」の裏に当時の絵図が記してあった。戦前に公表された故大場磐雄博士等の論文に載録されている元禄古図とはこの絵図のことである。九十九坊の字名の下に「とうの跡」と書かれた正方形があり、その中に心礎および四天柱礎らしきものがみえる。この判決文は『千葉県君津郡君津町誌』前編に収録されたが、裏面の絵図⁽¹⁾は省略されている。現内蓑輪地区自治会長である影山省三氏の邸宅に、近世からの内蓑輪村関係の古文書が蔵せられている。かの絵図もその中に含まれていないかと見分したが、残念なが

らみつからなかった。

九十九坊廃寺跡の塔基壇は現在でもはっきり残っており、比高差70cmの盛りあがりを見せている。近世の時にも塔基壇の盛り上がりは人々の目を引き、地図作成のおりに1つの標点となりえたのであろう。

江戸時代後期の国学者岡田真澄が、九十九坊廃寺跡の周辺で古瓦を拾得している。⁽²⁾九十九坊廃寺跡は明治年間の地誌で九十九坊址と命名された。付近から礎石が出土したという伝聞や、里見、北条2氏の合戦の際に寺が兵火を罹り、寺の梵鐘が鐘ヶ淵（弁天池）に飛び、さらに鎌倉建長寺へ飛行したという口承伝説も地誌に付された。⁽³⁾爾来、九十九坊廃寺跡は古代寺院跡として江湖にその名が知れわたり、各種の地誌に記された。⁽⁴⁾

昭和8年に内藤政恒、大場磐雄、篠崎四郎の3名により、九十九坊廃寺跡の発掘が遂行され、その調査報告が翌年に公表された。発掘調査自体は塔跡を中心とする小規模なものであったが、報告には寺跡周辺に持ち去られた礎石の所在、軒先瓦の文様、塔規模の複原、堂塔の伽藍配置想定等々が記載され、同時の寺院研究の学問的水準からみると、かなり内容の充実した調査報告であった。報告によると、九十九坊廃寺は北に講堂、講堂の南東に金堂、南西に塔を布置する法隆寺式の伽藍配置で、塔は三重塔、時代は奈良時代と判定された。九十九坊廃寺の性格を⁽⁵⁾考察するにあたり、この3氏による報文は不可欠な文献である。この時の出土した遺物は八重原小学校で保管されたらしいが、その後の経緯についてはあまり詳らかでない。

故大場磐雄博士等によるすぐれた研究が発表されてから、九十九坊廃寺跡は昭和10年12月24日付をもって千葉県指定文化史蹟となつた。⁽⁷⁾その後昭和29年に塔基壇跡および周囲の畠地を君津町が買収し、まわりに柵をめぐらし、史跡公園として遺跡を整備した。⁽⁸⁾

戦後の九十九坊廃寺跡に関する研究は、一つには富津市飯野の内裏塚古墳群中の終末期古墳との関連性が取り沙汰されている。関東地方で最古の創建といわれている下総国白鳳期の竜角寺と隣接する古墳時代終末期の大型方墳、岩屋古墳との間にみられるような関連性が、小糸川中流域にある九十九坊廃寺と下流域の割見塚古墳等の間にも考えられるからである。富津市飯野地区では昨年度と今年度にわたり、君津都市文化財センターが一帯の古墳確認調査を行なつており、その成果の一部が公表されている。⁽⁹⁾ともあれ、これらの調査成果をあわせて比較検討するならば、古代の小糸川流域の一端をとらえることができよう。

一方、房総地方の古代豪族による造寺活動という視角から、九十九坊廃寺をとらえる動きがある。文様瓦の精緻な型式学的研究に裏打ちされた一連の研究は、古代豪族の活躍ぶりをみごとにうきほりにしている。⁽¹⁰⁾

九十九坊廃寺跡の出土瓦は、現在県立房総風土記の丘、県立上総博物館、君津市立久留米城址資料館、八王子市郷土資料館に収蔵されている。一説によると上総博物館と久留米城址資料

館所蔵の古瓦は旧八重原小学校蔵であったという。八王子郷土資料館蔵の古瓦は井上コレクション⁽¹⁾の中の1点である。井上コレクションは古物商から購入したものが多いようなので、九十九坊廃寺の古瓦も骨董販買を経たものであろうか。房総風土記の丘蔵の古瓦は旧文化センター所蔵であったというが、どのような経過をへて旧文化センターが古瓦を入手したのかあまり判然としていない。

九十九坊廃寺跡については、以上のような研究の足跡がみられる。かかる先学諸兄の蘊蓄に新たな一石を投すべく、今回の発掘調査が企画された。調査の計画は伽藍の正確な規模と堂塔の配置、および寺域の確認を意図して立案された。

註

- (1) 君津町誌編纂委員会『千葉県君津郡君津町誌』前編、1962年、P. 182~4
- (2) 千葉県君津郡教育会『千葉県君津郡誌』下巻 1927年、景印本、P. 560
- (3) 小沢治郎左衛門『上総町郷誌』1889年、複刻版、名著出版、P. 303
- (4) 千葉県『千葉県誌』巻下 1919年、複刻版、P. 923。(註2) P. 560
- (5) 内藤政恒、大場磐雄、篠崎四郎「上総國九十九坊廃寺跡調査報告」「史蹟名勝天然紀念物」第9集第9号 1934年9月、P. 696~727。『大場磐雄著作集』第4巻 雄山閣 1975年、P. 29~61に転載。なお篠崎四郎「上総國九十九坊廃寺跡」「房総郷土研究」第1巻第10号 1934年9月、複刻版、P. 113~4 参照
- (6) 君津町誌編纂委員会(註1) P. 86~7
- (7) 千葉県告示第943号
- (8) 藤原久満治『史蹟九十九坊廃寺跡』千葉県君津郡君津町 1955年、P. 33~7
- (9) 甘柏健「内裏塚古墳群の歴史的意義」「考古学研究」第10巻第3号 1963年12月 P. 23。甘柏健、久保哲三「関東」「日本の考古学」IV 河出書房新社 1966年、P. 486~9
- (10) 「二間塚遺跡群確認調査報告書」君津郡市文化財センター発掘調査報告第5集 1984年
- (11) 須田勉「上総國分寺の造瓦組織と同范瓦の展開」「史館」第10号 1978年5月、P. 57~70。
同「古代地方豪族と造寺活動」「古代探叢」早稲田大学出版部 1980年、P. 433~474
- (12) 「房総の古瓦」千葉県立房総風土記の丘展示図録No 4 1978年、P. 18, 39
- (13) 「井上コレクションの古瓦」八王子市郷土資料館 1982年、P. 50

II 調査の方法と経過

1. 調査の方法

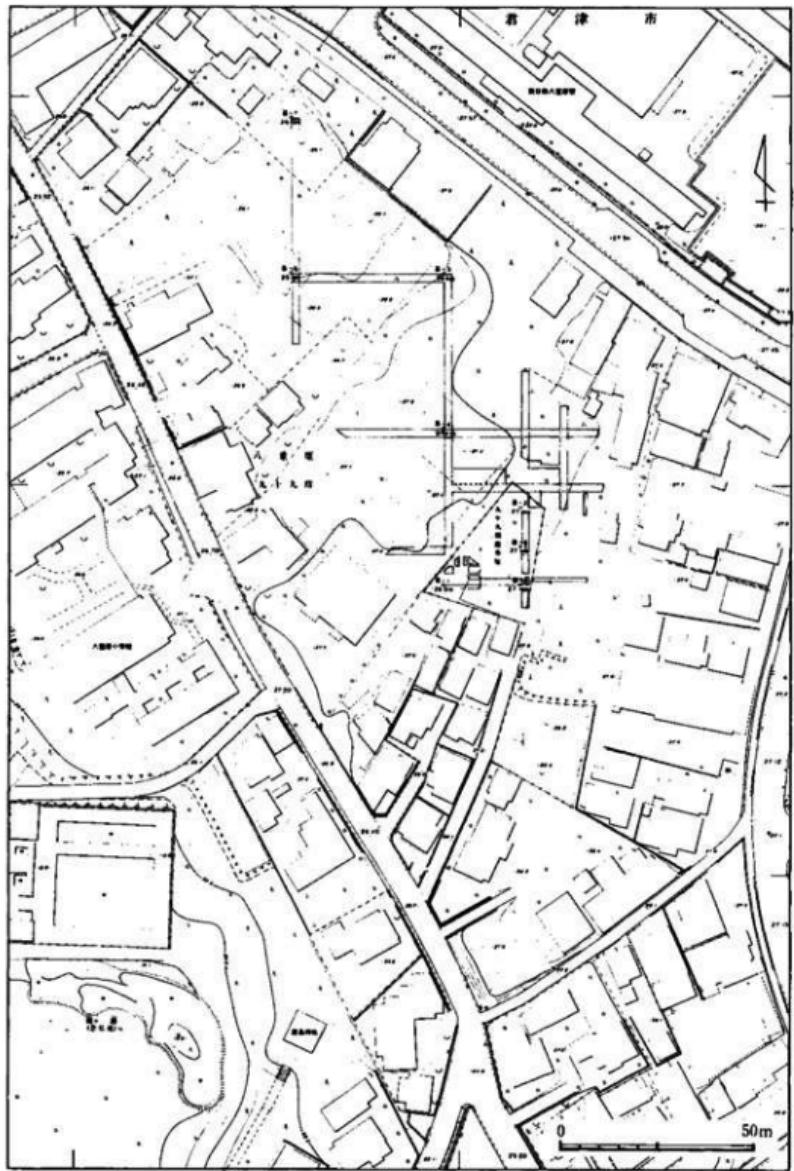
発掘調査をはじめるにあたり、九十九坊廃寺址は、塔基壇が明瞭に遺存し、心礎、側柱礎もさほど後世の動きをみせていないと思われた。また、戦前に故大場磐雄博士等により作成された法隆寺式の伽藍配置想定図があった。これらの状況のもと、今回の調査目的をも合わせて考へるならば、発掘調査の方法として、グリット発掘よりもトレント発掘の方がより有効的であろうと判断した。そこで、塔基壇を中心に東西南北、また講堂推定地を中心に東西南北のトレントを設け、さらに寺域確認用のトレントをのばして設定した。これらのトレントの方位は国土地理院座標を基準とした。トレント幅は基本的には2mとし、一部1mとした。トレントの番号は順次つけていった（付図）。

2. 調査の経過

現地での発掘調査は11月5日から開始し、12月24日に終了した。調査にはいる前に周囲の地形測量および基準点測量を測量会社に委託した。11月上旬に発掘区周辺の伐採とトレントの設定をおこない、12日から掘りはじめる。11月の中頃から講堂と推定される区域および塔基壇のトレントを掘り下げた。11月下旬に講堂の基壇上面を検出した。さらに基壇上面の一部を掘り下げるに、版築中に瓦を敷きつめた面があることがわかった。塔基壇は発掘前から比高約70cmのたかまりをみせていた。基壇のたかまりの上部20~30cmは瓦礫が層を成し、これにまざって最近のものと思われる陶器片やガラス片が出土した。これらの瓦礫をとりのぞいて、塔基壇の検証につとめた。

12月2日に現地説明会をおこなった。12月にはいって、塔、講堂の掘り込み基壇の正確な範囲の把握に力をそそいだ。塔基壇東側トレントを掘り下げ、版築のローム掘り込み箇所を探ったところ、やや構造を異にする2つの版築が存在することに気がついた。また、講堂の基壇の範囲については、北辺、西辺、南辺をおさえることができた。これらの基壇範囲確認作業と平行して遺構の写真撮影、実測をおこなった。

12月5日、講堂西側トレントを精査中、列をなす巨大な掘立柱痕がみつかった。急速北側に拡張区を設けて掘りはじめると共に、周辺のトレントを精査した。その結果、続々と柱痕がみつかった。発見当初これらの柱穴群は規格性をなすと判断し、堂クラスの大型建物の存在を想定した。けれども、実際に実測図を作成して調整してみると、柱列の向きや相互の柱間の距離に微妙な狂いが生じ、結局、曖昧模糊と化してしまった。また、講堂から約65m北西のはなれた地点からも大きな柱根痕が1つみつかっている。



第2図 周辺の地形およびトレンチ設定図 (1/1,500)

今回の調査の目的の1つであった寺域の確認については、上総国分寺等で寺域を画する施設として溝を掘削していることから、九十九坊廃寺跡でも類似した溝を発見できるのではないかと期待していた。11月下旬に講堂の西約30mの地点のトレンチ内から南北に走る溝状遺構をつけ、もしや待望の寺域区画用の溝ではないかと胸を躍らせた。しかし、溝を掘り出すむにつれ、破損したボリバケツ等のゴミが出土するにおよび、この溝が最近のものであるとわかった。土地の人聞くと、かつてここに防空壕があったという。

発掘面積としては、発掘区設定で800m²強をかぞえたが、ローム面まで深さ1mを越えたり、植木を栽培していたりして、完掘不可能な箇所が一部にあった。

整理作業は、発掘終了後から翌60年2月にかけて遺物の水洗、注記、接合作業をおこない、それに並行して隨時作図、報告書執筆等をおこなった。おりから年度末の雑事多忙の時期とかなり、思うように作業は捗らなかった。

III. 検出遺構

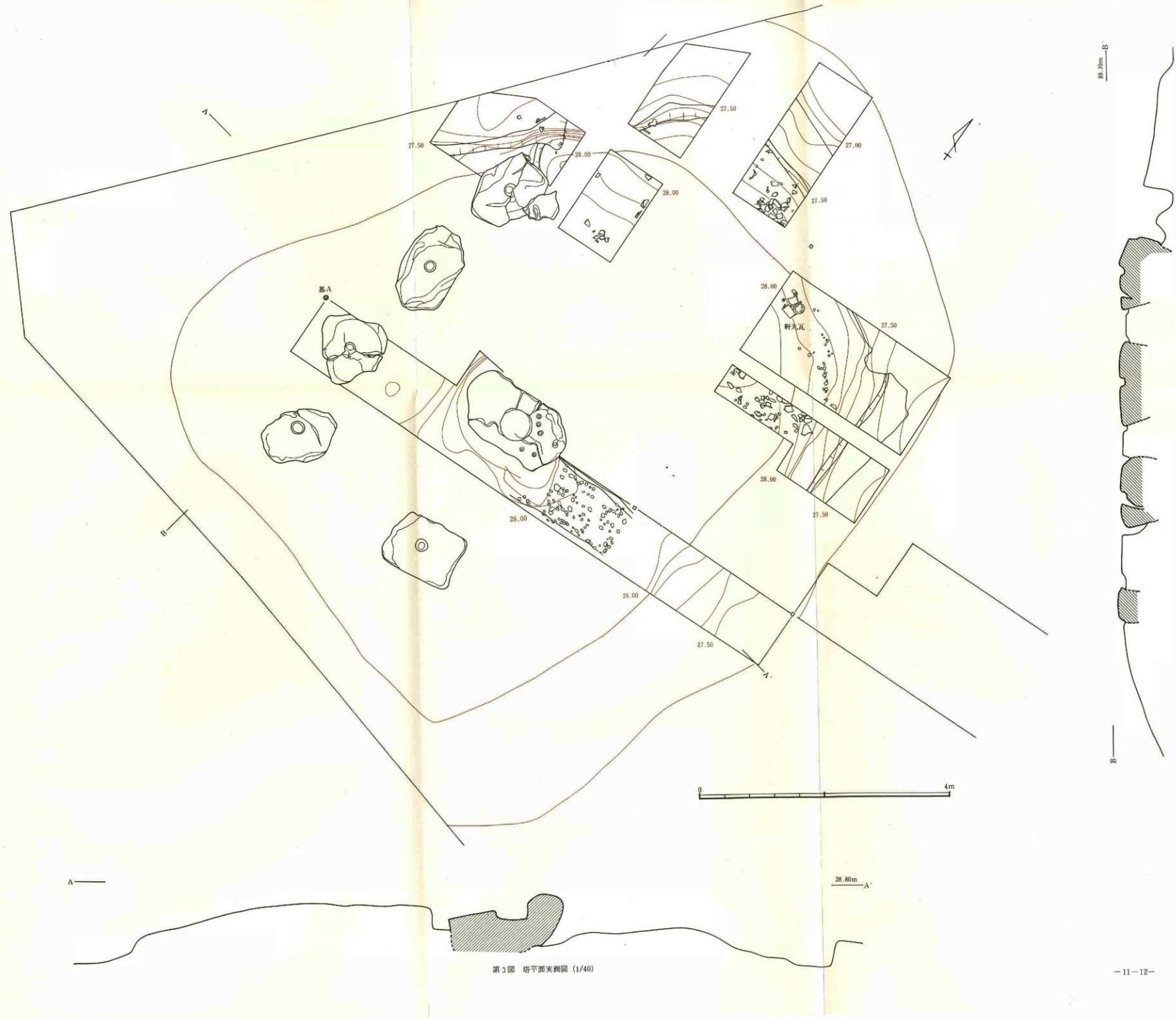
今回の調査で確認された遺構を、塔、講堂、掘立柱建物群、およびその他の遺構の4つにわけ概略する。

1. 塔(第3・4図、図版2-1~3、図版3-1~2)

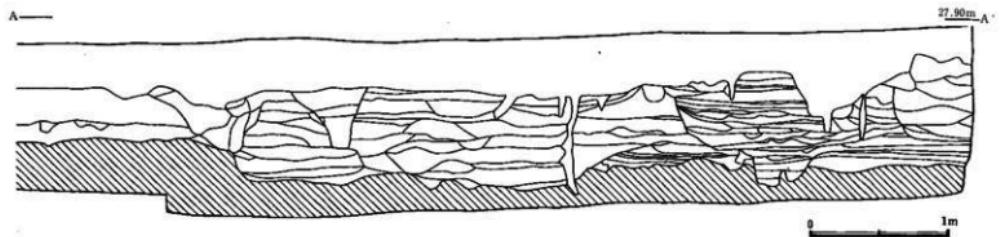
塔基壇は発掘調査前から比高差約60~70cmの高まりをみせていた(図版2-1)。基壇上には心礎をはじめ、側柱礎が5つ顔をみせていた。心礎真南の礎石は近年ここに移されたという。塔基壇西側と南側にはコンクリート製の杭列が走っている。基壇上面は多少の凸凹をみせるが、ほぼ平面にちかい。この平坦面は東西約7.5m、南北約9m、北辺を短辺とする梯形をしめす。

おそらく基壇の西辺は後世の畑作耕作等によって一部破壊されたため、基壇平面は元来の正方形から梯形に変化したと思われる。心礎は東西を長軸とする楕円形の磐石で、基壇平坦面のほぼ中央に位置する(図版2-3)。心礎の計測値は東西185cm、南北98cmをかぞえ、表面は東から西へ斜めに傾いている。中心部には径約50cm、深さ27~14cmの穴が穿たれている。礎石表面は傾斜しているにもかかわらず、穴の底面はあらまし水平で、若干すり鉢状である。側柱礎は5個あり、そのうち西辺の4個はさほど動いていないと思われる。各側柱礎の中央には孔が開いている。孔の大きさは一定しており、径17cm、深さ7cmを計る。列をなす4個の側柱礎のうち、南端の1個のみはやや北東にずれる。側柱の孔も北の3個はほぼ直線上に幅1.8mの間隔でならぶ。この3個の側柱礎の孔をむすんだ直線は真北から12度東へ偏る。塔の方位は側柱の方向と同一の角度であろう。これらの礎石はみな房総半島によくみられる凝灰質砂岩である。

塔の発掘は心礎を東西にとおる幅1mのトレンチ、および基壇北辺を中心とする発掘区を設



第3図 塔平面実測図 (1/40)



第4図 塔基壠東側土層断面図 (1/30)

けた（第3図、図版2-2）。発掘区設定後掘りすすめるにしたがって、小さい瓦片と小礫が大量に出土した。その中に近世陶器片、ガラス片も混入していた。これらの瓦礫は、おそらく付近を耕作中に障害物としてあつめられ、高まりをみせていた塔基壇周辺に一括して投棄されたものであろう。この瓦礫層の下から本来の基壇が姿をみせた。基壇上面は明茶褐色のかたい面をなしていた。ところどころに小礫が散在しているが、何らかの設備を構成するものと判断するまでにはいたらない。東辺の一部に約30cmの比高をなす垂直にちかい立ちあがりが検出された。この立ちあがりが当初の基壇東辺である可能性もある。しかし西側の側柱の位置と心礎の位置から基壇の範囲を復原すると、東辺はもうすこし東側に寄るとも考えられ、削減されているかもしれない。北辺ははっきりとした立ち上がりをみせず、緩斜面をみせている。西北部は側柱礎の手前まで削られている。

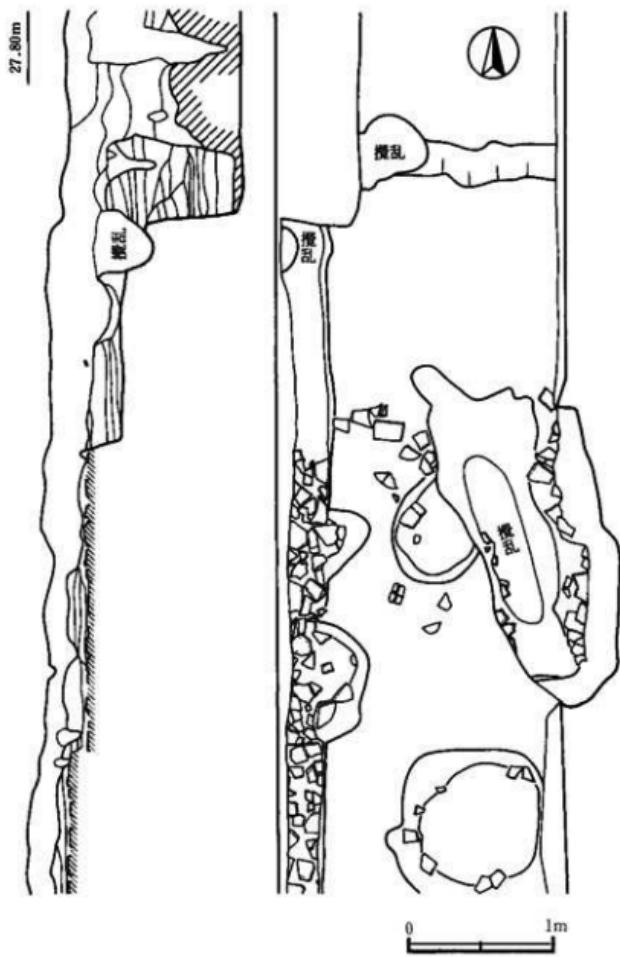
出土した遺物は瓦礫が主である。東北部の発掘区から軒丸瓦が1点出土した。いわゆる三重團文縁四葉草弁蓮花文の軒丸瓦で、多少基壇上面から浮いていたが、塔の屋に葺かれていたものとみてまちがいないであろう。瓦礫にまざって鉄釘数本が出土している。その他に、心礎の周辺から鉄滓が2点出ている。

基壇版築の構造を確かめるため、塔基壇東側に東西に走るトレンチをいれた（第4図、図版3-1）。その結果、心礎の中心から東へ11.4mの地点よりロームを掘り込んだ版築がはじまっていることがわかった。土層各層はややあつく、粗雑な観を受ける版築である。これとは別に3.7m内側の地点から、層のより細かい緻密な造りをみせる版築が見つかった（図版3-2）。外側の版築のひろがりを塔基壇の版築と考えると1辺約23mの掘り込み基壇となり、あまりにも広い範囲にひろがってしまう。塔の北側のNo1トレンチとNo2トレンチからは何らの版築らしい土層は検出されておらず、基壇の版築はそれほど広い範囲にひろがっていたとは思えない。層のあらい外側の版築を塔基壇の版築とする確証はない。

2. 講堂（第5～12図、図版3-3～6-3）

講堂は塔基壇の北東約30mのところに位置する。調査前は、わずかな盛り上がりをみせていた（図版3-3）。植木抜きとり穴の壁に平瓦が顔を出していたこと、比較的大きい平瓦片が大量に散乱していたこと等々の理由から、故大場磐雄博士等が想定したように、おそらくこの付近に講堂が位置すると予想をたてていた。

講堂のほぼ中央にはしるNo7トレンチの表土を除去すると、ロームでつきかためた基壇上面を確認した。ところどころ攪乱をうけているが、水平に近い。北側は削平をうけて、ゆるやかな傾斜をなしている。基壇上面の攪乱孔や凹地に瓦を敷きつめた面が顔をのぞかせていた。不審に思い、幅30cmのサブトレンチをトレンチ内西側に設定して約10cm掘り下げたところ、案の定、水平に瓦を敷きつめた面を検出した（第5・6図、図版4-1）。瓦敷きは1辺15cmから20



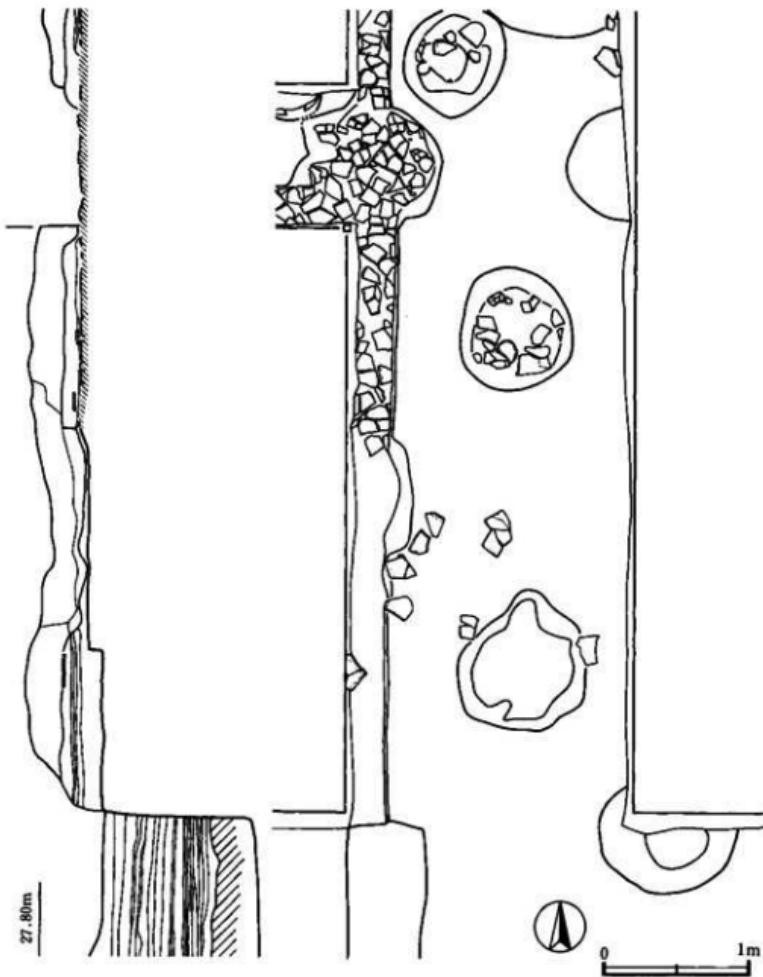
第5図 講堂基壇平面実測図(北 1/40)

cmの大きさの平瓦を、格子の叩き面を上に向けて敷きつめてあった(図版4-2)。中央より北側には、さらに10cm下の段に瓦敷きの面があった。おそらく上段の瓦敷き面が削除され、下段の瓦敷きのみが残ったのである(図版4-3)。北辺部あたりは下段の瓦敷きさえも取り除かれていた。基壇南辺部はコンクリート製杭柵により破壊されていた。

No.7トレチ
中央に直行して
No.10トレチ

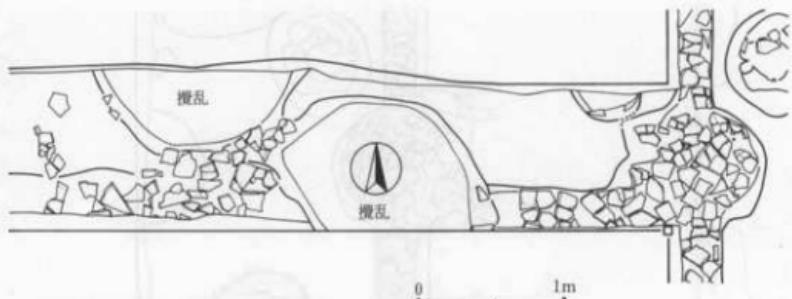
設け、基壇の西側のひろがりを調べた(第7図、図版5-1)。大きな擾乱孔によって基壇は傷つけられていたが、ここでも上下の段をなす瓦敷き版築を認めることができた。しかし、西辺部まで瓦敷きは続かなく、削平をうけていた。

基壇上面の西辺、北辺、南辺の遺存状態が悪いので、やや東寄りの高まった場所に幅1mのNo.11トレチを設け、保存状態の良好な基壇南辺の検出につとめた。このトレチの北側1.4mまでは、表土を除去するとロームをつきかためた版築上面が認められ、その南側を掘ると、



第6図 講堂基壇平面実測図（南 1/40）

軟かくしまりのない黒褐色土にまじって大きな瓦片が大量に出土した（第8図、図版5-2）。ロームをつきかためた基壇端部（スクリーントーン貼付範囲）には平瓦が並んでおり、その南には、比高差約30cm下に硬い面がある。この付近をもって基壇南辺と考えたい。トレント南側から出土した大量の大形古瓦片は、堂宇倒壊後、堆積したままの状態を保っていたのであろう。このトレントの西側にも幅20cmのサブトレントをいれ、版築中に瓦敷き面があることを確認し



第7図 講堂基壇平面実測図（西 1/40）

た。さらに北へのばし、No.8トレンチ中に南北にはしるサブトレンチをいれ、この瓦敷き面が続くことを認めた。

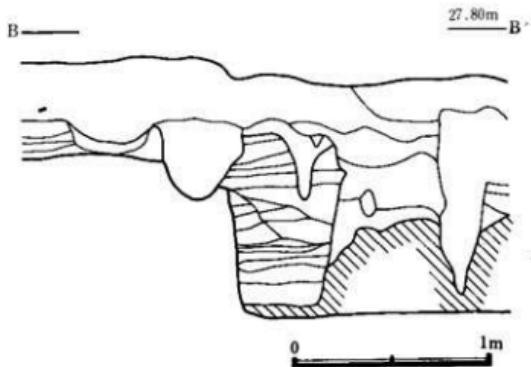
瓦片が集中して出土した地点が2ヶ所ある。1ヶ所は講堂の東南寄り、No.11トレンチの北側、No.8トレンチ内にある。径1.2mの範囲内に軒丸瓦2点と平瓦片が散在していた（図版5-3）。基壇上面より少し浮いている。もう1ヶ所は同じくNo.8トレンチ内で、講堂中央やや南側にある。平瓦が散布されたような状態であるが（図版6-1）、版築中の瓦敷きよりも雑ななり方をみせており、人為的に置かれたものなのか、それとも自然に堆積したものなのか、判断しかねる。

出土遺物は、古瓦がほとんどで、他に数点の土器片がみつかっただけである。文様瓦は軒丸瓦7点、軒平瓦数点をとりあげた。講堂の北西から土師製の香炉の紐が1点出土している。

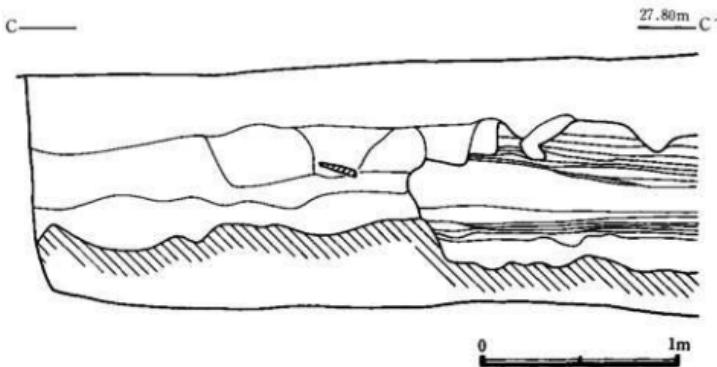
第8図 講堂基壇南辺平面実測図（1/40）

掘り込み基壇の版築の範囲は、北辺、南辺、西辺の3辺をおさえることができた。すなわち講堂中央南北に通るNo.7トレンチ、東西に通るNo.8トレンチ、西北部にかかるNo.6トレンチでそれぞれ確認した（第9～12図、図版6-2～3）。講堂基壇の版築はロームを掘り込んで造成している。版築を構成する土層はかなり細かく分層することができ、緻密な観をうける。No.8トレンチの東端まで版築が続くので、掘り込み版築の東辺はさらにもっと東側にあると思われる。残念ながらNo.8トレンチの東側は芝生の庭先となり、今回の調査では発掘不可能であった。

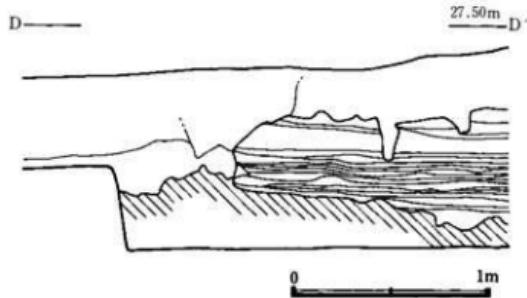




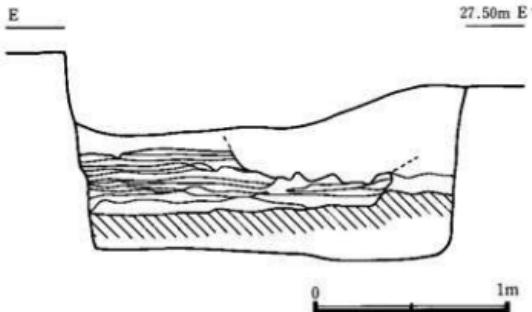
第9図 講堂基壇北辺土層断面図 (1/30)



第10図 講堂基壇南辺土層断面図 (1/30)



第11図 講堂基壇西辺土層断面図 (その1 1/30)



第12図 講堂基壇西辺土層断面図（その2 1/30）

掘り込み版築の北辺、南辺、西辺の位置をもとに基礎版築の規模と方位を推定できる。南北15.3m、東西はすくなくとも21.5mある。東西長はあと数mのびるであろう。方位は真北から6度東に偏る。

3. 掘立柱建物群（第13図、図版7-1、2）

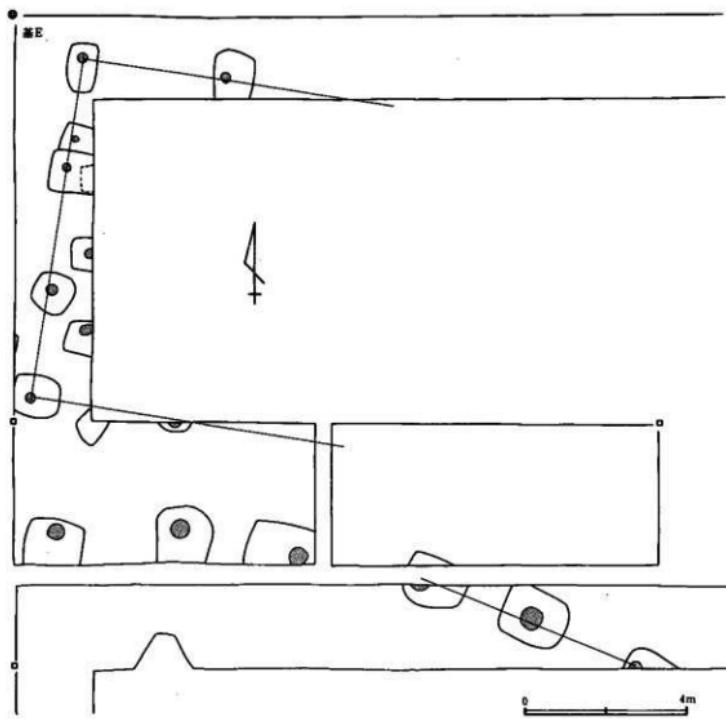
講堂西側に掘立柱建物群がある（第13図）。No.8トレンチ、No.8拡張区から掘立柱穴痕が6個（図版7-1）、No.2南トレンチ、No.3東トレンチから10個みつかった（図版7-2）。発見当初これら掘立柱穴群は整列をなすと思われたが、いざ図面を作成して調整してみると、柱穴の方位および柱痕間の距離に多少相違のあることに気がついた。現地で数棟の建物を想定しながら柱痕の組合せを考え、残余の掘立柱の検出に力をそそいだ。けれども結局、図示した柱穴痕しかみつからなかった。

掘立柱の組合せは2組できた。1組は講堂基壇版築のすぐ西に隣接し、掘立柱が3個並んでいた。柱痕間は3mを数える。個々の柱穴掘り方はかなり大型で、長軸1.6m、短軸1.3mの長方形をしている。ロームを混入してつきかためていた。柱痕も大きく、径60cm近くあった。深さも棒スティックで確認してみると、1mを楽に越えてしまった。この柱列が一体どのようにのびるのか、南北東西、柱痕をいろいろ組合せ、トレンチ内を精査してみたが、他につながる掘立柱はみつからなかった。

もう1組の掘立柱群は、No.2南トレンチ内にほぼ南北に縦列する4個の掘立柱と、その北辺、南辺の東にそれぞれ掘立柱が1個みついている。方位は真北から東へややすれる。柱痕間は、東西が3.6m、南北が2.7m、3m、2.7mである。柱穴掘り方は前記の掘立柱群のものよりも小型で方1m強である。柱痕も小さく、径25cm前後である。この建物の規模も4辺が明確でないため、はっきりとしていない。

4. その他の遺構（付図、図版7-3）

塔、講堂、掘立柱建物群のほかに2、3の遺構がみついている。No.5南トレンチ南端に、大型の掘立柱穴痕が1つあった（図版7-3）。南北1.2m、東西1.5m以上の掘り方で、中央に明瞭な柱抜き取り痕があった。柱抜き取り痕から察すると、柱の径は約50cmもあったと思われ



第13图 講堂西侧獨立柱建物群 (1/100)

る。この掘立柱の周辺からは鉄滓数点、および吹子羽口片が1点出土しており、何らかの工房に関する建物がこの付近に存立していたと考えられる。

No.2 北トレンチ内、やや南寄りから掘立柱痕らしい正方形のおちこみがみつかった。掘立柱の掘り方とするにはやや明暗がはっきりしない。発掘せずに未掘のまま埋めもどしたため、性格のはっきりとした確たる遺構とはできなかった。

今回の調査の目的の1つである寺域確認については、当時の寺域は溝でもって画していたであろうという想定のもとに、溝状遺構の検証につとめた。塔の側柱礎、講堂基壇の方位を鑑みて、No.3 西トレンチ、No.2 北トレンチ内での溝状遺構の走行を期待したが、無念に終わった。No.3 西トレンチの西側はかなり攪乱をうけていた。またトレンチのほぼ中央に溝状遺構が南北に走っていたが、後にこの溝は最近のものであることが判明した。

IV. 出土遺物

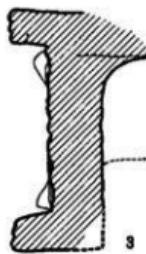
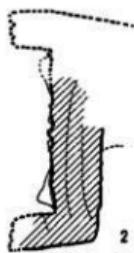
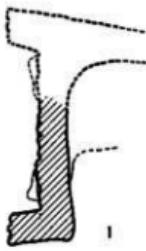
出土遺物の大半は古瓦が占める。その他に土器片、香炉の紐、鉄釘、鉄滓、吹子羽口片が出土している。年代判定の決め手となる良好な遺存状態の土器がみあたらず、瓦以外に実測可能な遺物も数が少ない。瓦は格子叩目文の平瓦が主である。大量の古瓦はいくつかの種類に分類できるであろう。時間の制約上、今回の報告では文様瓦のみとりあげ、他の遺物の紹介については次の機会にゆずる。

1. 軒丸瓦（第14図、図版8）

すでに戦前に発表された故大場磐雄博士等の論文の中で、九十九坊廃寺跡から2種類の軒丸瓦の出土が報じられている。今回の調査でとりあげた軒丸瓦も既報の2種類の軒丸瓦と全く同一部類のもので、その他の型式に属する軒丸瓦は1点も出土していない。2種類の軒丸瓦の文様はいはずれも三重圓文縁四葉單弁蓮花文である。

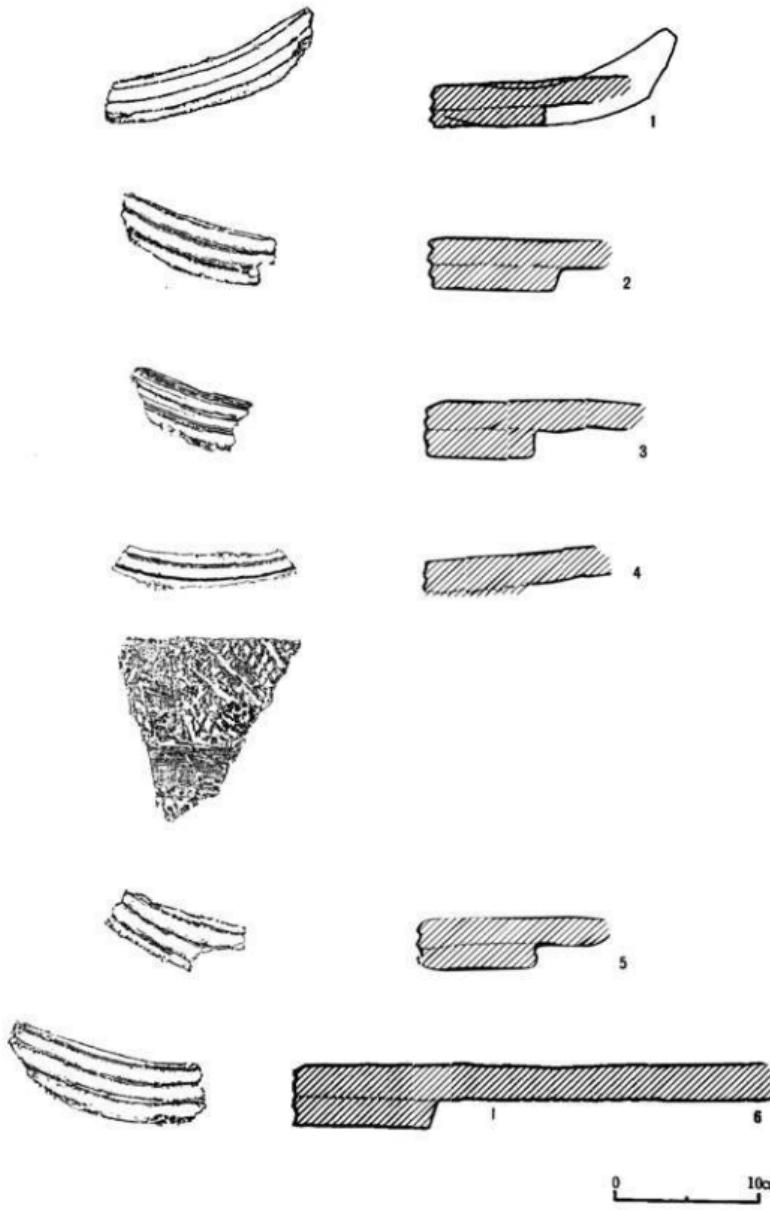
1の軒丸瓦は大場博士のいう第2類のものである。直径は15.5cmある。周縁は三重圓文で、幅2.3cm、高さ2.1cmある。内区は中房径が4.3cm、蓮子数は3+12である。弁は2重の描線で表現されており、幅は3.1cm。まん中に偏平な子葉があり、子葉の先に細い線がのびる。この瓦当の裏面が1の写真である。指頭でなでた痕跡がはっきりと看取できる。

2~4の軒丸瓦は大場博士のいう第1類のものである。直径は17.1cmある。周縁は三重圓文で、幅2.4cm、高さ2.6cmある。内区は中房径が4.1cm、蓮子数は1+8である。弁は外側に描線をめぐらし、その中心に子葉、両側に肉太の弁がつく。子葉の先端から細い線がのびる。間弁はかなり突出している。3と4では45°回転している。4の瓦当裏面が1の写真である。2の瓦当は半欠しており、離脱した箇所を観察することによって製作手法がうかがえる。八王寺



0 10cm

第14図 軒丸瓦



第15図 軒平瓦

郷土資料館蔵井上コレクション、房総風土記の丘および上総博物館蔵の軒丸瓦は全てこれと同一型式である。

ここに図示した軒丸瓦は全て講堂から出土したものである。講堂基壇中の瓦敷きからみつかったものもある。塔基壇北東部から出土した軒丸瓦も2~4と全く同じ型式の文様である。

2. 軒平瓦（第15図、図版9）

大場博士は軒平瓦も軒丸瓦同様に2種類にわけた。しかし両者ともに段頭三重弧文軒平瓦で、頭の浅深でもって大場博士は類別している。今回とりあげた軒平瓦も全て段頭で、三重弧文であった。瓦当面の完存しているものはなかった。彫りの浅い簡素な三重弧文はおそらく同一の型引きであらわされたのであろう。4は頭が離脱している。6は頭および頭の内側3cmのところまで下面に朱が塗布されている。

ここに図示した軒平瓦は全て講堂から出土した。塔基壇からも心礎付近で瓦礫に混入して、段頭のついた三重弧文の軒平瓦片が出土している。

丸瓦には玉縁付の丸瓦の端がみつかっていないこと、ほぼ完形に近い行基葺式丸瓦が出土していること等から、堂宇の屋根瓦の葺き方は行基葺きであったろう。行基葺きの甍に、見あげれば整齊な重弧文とやや華美な四葉蓮花文の瓦が連鎖していたのである。

V. まとめ

九十九坊廃寺跡の研究は故大場磐雄博士等の業績によるところ大である。すでに半世紀も前に九十九坊廃寺跡が3重塔を擁する法隆寺式伽藍配置の古代寺院であると世に公表されている。今回の調査はいわば大場博士等の後塵を拝する形でおこなわれたと言ってもよかろう。この間50年、学界に積蓄された見識もかなりの量にのぼる。近年の新しい動向をふまえつつ、九十九坊廃寺跡について新事実をつけ加えることができれば幸いである。

塔

塔はインドを起源とする伏鉢形の塔婆 stupa から発展し、簡略されて塔と呼ばれるようになった。元来は仏舍利（釈迦の遺骨）を安置する施設で、土盛された土饅頭の墳墓であった。したがって奉安形式の変化がそのまま仏塔の変化にむすびついた。日本古代の多くの仏塔にも舍利が納められていた。ところで、現身遺体の釈迦遺骨である肉舍利あるいは身舍利に対し、精神的遺産である教法を記した教典を法舍利と呼び、これを仏塔に奉安する思想が日本にも伝來した。⁽¹⁾ 金字光明最勝王經を国分寺7重塔に安置したのがその嚆矢である。また、百万基分置された木製3重小塔内に、無垢淨光經の根本陀羅尼、相輪陀羅尼、自心印陀羅尼、六度陀羅尼の⁽²⁾ 四種の經を印刷し、各塔に1本納めてたのも同じ発想による。

九十九坊廃寺の仏塔は基壇上に心礎と側柱礎が残存しており、あきらかに木造塔が建っていた

た。心礎の表面の位置は壇上式である。心礎中心部に径50cmの約1.7尺の穴があいている。この心礎面自体は傾斜しているが、穴底面は同じ角度で傾斜していない。それどころか、むしろ底面は水平なので礎石全体がかたむいたわけではなかろう。しかし、この傾斜面に木造多層塔を支持する心柱が立っていたと考えるにはあまりにも不自然である。篠崎四郎氏は表面の一部⁽³⁾が削落したために傾斜面が生じたと考えたようであるが、いくら軟質の凝灰質砂岩とはいえかかる磐石がそう簡単に整然と削落するものではなかろう。いずれにせよこの問題についてはまだ検討の余地をこさざるを得ない。心礎中央に円形の単純な穴があるのみで他に舍利孔等はない。この穴の大きさと深さから判断して穴に心柱を全部嵌入れたのではなく、⁽⁴⁾納入れしたのである。

心柱と側柱の間には四天柱がありそれを支えるのが四天柱礎である。通常、四天柱礎を設置する例が多いが、まま置かない例もある。九十九坊廃寺跡の塔がそれにあたる。基壇の西側に縦列するのは側柱礎である。南端の隅柱礎は動いているが、残りの3個は等間隔にほぼ直線上にある。側柱の並び方は、中間の2個の側柱の間隔が隅柱とつぎの側柱間よりも長いのもあり、また、等間隔のものもある。九十九坊廃寺跡の塔の場合、側柱礎の孔を基準に距離を測定すると1.8mあった。1尺を30cmとすると、6尺の間隔で側柱が並んでいた。これをもとに塔平面の1辺に復原すると5.4m、18尺となる。

⁽⁵⁾故石田茂作博士の式を応用すると、1辺長18尺÷心礎柱径1.7尺=10.6という数値が算出される。9または10という数値は3重塔を意味するといわれている。また、塔の高さは心礎柱座径の40倍前後と推定されるので、心礎柱径1.7尺×40=68尺という数値が得られる。つまり、⁽⁶⁾九十九坊廃寺跡の塔は7丈ちかい3重塔であったと推測される。しかし、石田博士の復原応用式に疑問がないわけではない。石田博士の推定根拠とした心礎柱径は必ずしも心柱の径とは一致せず、計算に合致しない多層塔の例も指摘されている。⁽⁷⁾ここでは、塔規模の復原に際し、塔平面1辺長を基本にしておく。1辺長18尺の塔平面規模は、古代の多層塔のなかでは小型の部類に属し、3重塔である。その高さは1辺長18尺の4倍、72尺としておく。

塔の方位は縦列する側柱礎の孔をむすんだ直線をもとに確定した。方位は北から東へ12度偏る。この地域の磁針は真北より約6度10分西偏する。したがって塔の方位は磁北から18度10分東へずれることになる。

塔基壇は単に版築の土壇に手を加えただけのようである。基壇は当初の姿をつたえておらず、おそらく、かなりの部分が削平されているのであろう。塔東側の掘り込み版築に2種類の構築方法がみてとれたが、この構築方法の相違の解釈については、いくつか仮説が考えられる。基壇版築をつくる際に部分的に単に構築方法をたがえたと考えるか。塔は時期を異にして2回建造されたと考えるか。塔の建立される以前に、別の建物がすこしづれた所に建っていたと考え

るか。これらの説のうちいずれが正しいか不明である。

講堂

現在の諸寺の講堂には、あらまし仏像が安置され、その前で諸事の法会をおこなうとともに、民衆へ帰依を呼びかけるのである。けれども往時の講堂は衆徒の会所であり、仏法を説き經典⁽⁸⁾を講義した場所であった。

九十九坊廃寺跡の講堂は塔の東北に位置している。基壇のみ残り、礎石はみあたらない。基壇は掘り込み版築で、巧緻に土をつきかためてつくられている。基壇周囲および上面に石や瓦を配するようなことをしておらず、単に土壇を削り出しただけのようである。版築中に瓦を敷いた面が2層確認できた。基壇築成上瓦を敷く意義をどのあたりにもとめたらしいのかわからないが、基壇の強度を補強する意図のもとでおこなわれたことはまちがいないであろう。このような基壇構造の類例について、管見するかぎりでは見あたらない。当地で独自に創作された工法とも考えられないので、とおく都から先進土木技術を導入したと考えるべきなのであろうか。

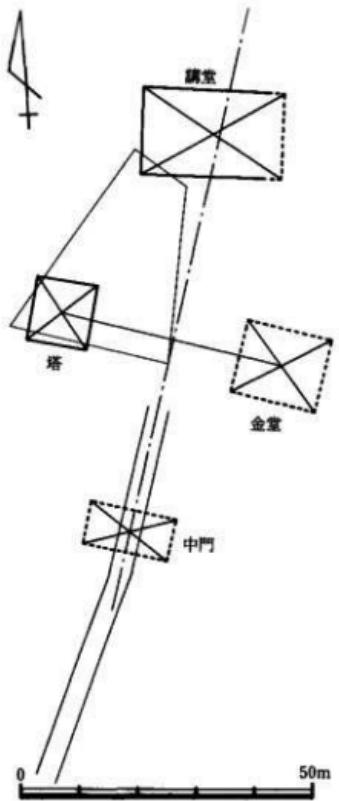
基壇の掘り込み版築の範囲については3辺をおさえることができ、規模は南北15.3m約51尺。東西はすくなくとも21.5m約72尺あり、もうすこし東側へのびると思われる。基壇上面は掘り込み版築のひろがりより若干内側になるであろう。堂宇の規模は、1間を10尺強と仮定すると、正面5間あるいは6間、奥行4間という数値が想定される。古代の講堂の間数は、飛鳥時代では8間×4間の偶数間。白鳳期は9間×4間、7間×4間、5間×4間で奇数間×4間となり、(9)奈良時代は大寺級で9間×4間、一般の寺は7間×4間といわれている。九十九坊廃寺跡の場合、どう考へても飛鳥時代の寺院とすることはできないので、飛鳥時代以降の奇数間×4間があてはまる。したがって講堂の規模は5間×4間くらいの大きさが妥当であろう。

講堂の方位は掘り込み版築のひろがりからもとめることができる。掘り込み版築の方位は、真北から東へ6度偏り、講堂の方位も同じく真北から6度東へよったであろう。この角度は礎北より12度10分東偏する。

伽藍配置

九十九坊廃寺の伽藍配置は北に講堂、その西南に塔、東南に金堂を配するいわゆる法隆寺式伽藍配置である。さて伽藍の主軸であるが、塔の方位は真北より東へ12度、講堂の方位は真北より東へ6度偏り、微妙な相違をみせている。一般に、塔と講堂を比較した場合、塔の方が先に建造される例が多いので、九十九坊廃寺の場合も塔の方位を主軸とすればよいのであろうか。

ところで、内藤氏は戦前に伽藍配置を想定する際に、現在公園となっている九十九坊廃寺跡周辺の畠に通ずる小径を、かっての正面大通路としている。この小径は今もあり、その幅は3.6mである。西側は現在人家が立ちならび、東側は墓地となっている。この道の中心線を北への



第16図 九十九坊廃寺伽藍想定図 (1/1000)

いる。おそらくこのあたりまでが伽藍の範囲内であり、中門はこの屈曲点よりも若干北に位置していただろう（第16図）。

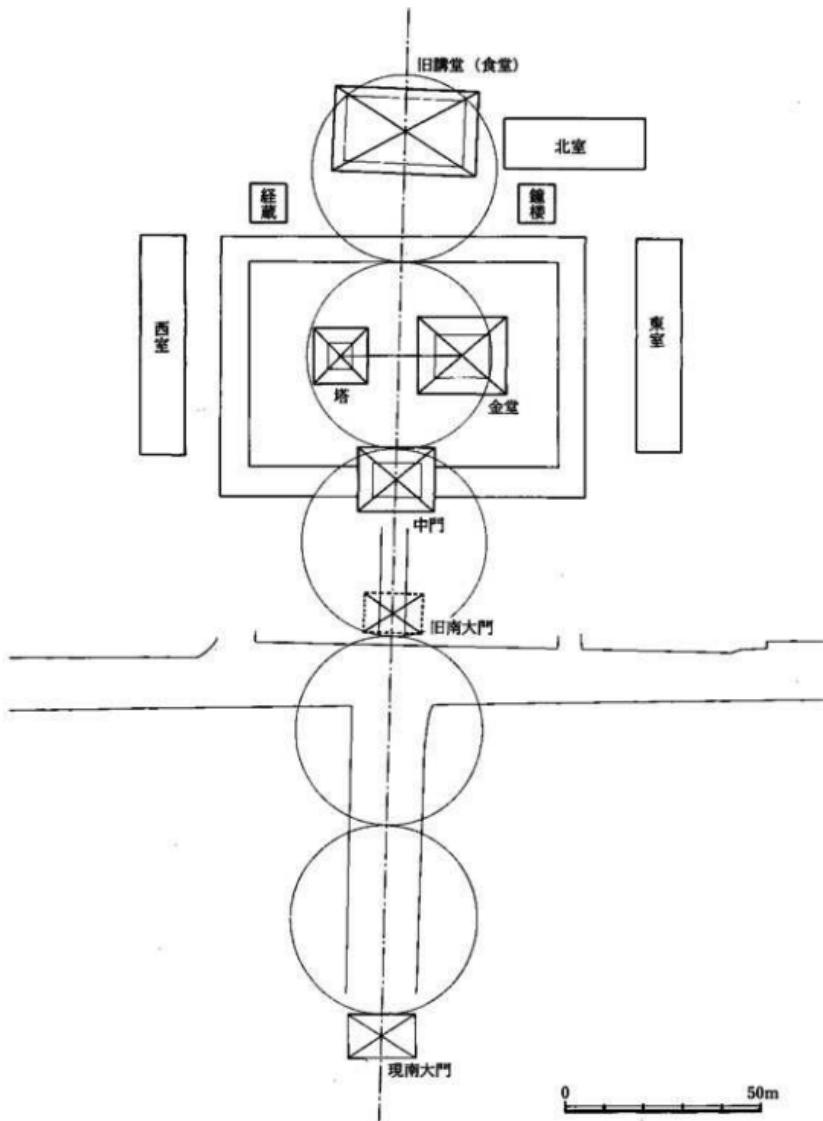
法隆寺式伽藍

九十九坊廃寺はいわゆる法隆寺式伽藍配置である。ところで、法隆寺式伽藍配置とは、戦前に故石田茂作博士が提唱した、北に講堂、その南、東に金堂、西に塔が布置するという飛鳥・白鳳期の古代寺院伽藍配置である。これらの堂塔伽藍配置には一定の規格性、地割が想定された。すなわち、伽藍中央の塔と金堂の心々を結んだ線から講堂までの距離を1とすると、講堂の反対側、南に同じ距離のところに中門が位置し、さらに中門の南側4倍の距離に南大門があるとした。

しかし、ここで注意しなければならないことは、石田博士が法隆寺式伽藍配置設定の基礎資

ばすと、そのまま講堂の正面にあたる。角度は真北より17度東にずれる。九十九坊廃寺跡を公園にした時、昔の地割をそのまま継承し、その周囲に柵列を設置したのである。今この柵列を考えると、東側の南北にはしる柵列は講堂正面にのび、角度は真北から東へ10度ずれ、塔の方針と若干一致する。南側の柵列線を東へのばすと、先ほどの道の中心線と直交し、さらにこの点あたりで東側の柵列線と交わる。これらのことから、おそらく、道の中心線は内藤氏が考えたように九十九坊廃寺の主軸線であり、北に位置する講堂の向こう正面の真中に達していたのであろう。すると、現在公園となっている柵列でかこまれた九十九坊台191番地の土地は、ちょうど講堂の西南部分から塔までをふくむ地割が、乱されることなく後世に伝えられたのだと解釈できよう。

伽藍の主軸がきまるとき、おおよその金堂の位置を予想することができる。すなわち、金堂は主軸線をはさんで、塔と対称の場所、現九十九坊台180番地の北側と181番地の墓地付近にあつただろう。中門は講堂に通ずる道路上に想定できる。塔の心から東へのばした線と主軸線とが直交する地点より約40m南のところで、道路がさらに東に角度を変えて屈曲して



第17図 法隆寺西院旧伽藍配置図 (1/1500)

料とした法隆寺西院および法輪寺の伽藍配置が、戦後の調査等で若干修正されていることである。まず法隆寺西院現大講堂の南側に東西の回廊がはしり、講堂はその北に位置することが指摘された。⁽¹²⁾その後、昭和大修理の際におこなわれた法隆寺の堂塔調査の成果が公表され、9間ある現大講堂が元来8間堂であることが確実となった。近年、奈良国立文化財研究所が西院および東院を発掘調査している。⁽¹³⁾

今ここで、法隆寺西院の現伽藍配置ではなく、旧伽藍配置を図示してみる（第17図）。若干の説明を加えておく。現大講堂の基壇は元禄大修理の時に新造されたものである。この堂の地下西南隅およびその他の地点から凝灰岩、花崗岩の基壇積が発見された。この基壇は平安時代中頃、正暦年間に再建された再建講堂の基壇であるが、この基壇が前身堂のままのものなのか、正暦再建の際に改造をうけたもののかは明確でない。一応、伽藍配置図にいれ、心をだし、他の堂塔との心々関係をおってみた。すると、この旧基壇の心は中門、現南大門のそれと一直線にならぶことがわかった。

この直線は現南大門後背の道路、および中門前面の道の中心をはしる。また、経蔵と鐘楼との間の中心をとおる。塔と金堂の心々をむすんだちょうど真中ではないが、ほぼ中心をとおる。これらの状況から、旧基壇、中門、現南大門を結ぶ線が、往時の法隆寺西院伽藍の主軸線と考えてよいだろう。

旧基壇には前身堂以外に7間×5間、正面90尺奥行46尺の掘立柱建物が前身堂内にすっぽりはいる形で発見された。この掘立柱建物と前身堂との関係については、古くは喜田貞吉氏が指摘している。⁽¹⁴⁾すなわち前身堂を天平年間に作成された『資財帳』記載の食堂とし、掘立柱建物を食堂以前の北室としたのである。ところで、1980年度の発掘調査により、現大講堂の東側より『資財帳』に記されている長10丈6尺広3丈8尺の僧房にあたる北室が発見された。これにより、前身堂が『資財帳』の食堂である可能性がさらに高まった。掘立柱建物を天平期の食堂以前の北室とするには、なお疑問が残る。この建物が前身堂以前にほぼ同じ大きさで同一の場所に建っていたことは、それが「食堂」、講堂と同じほど重要な堂宇であったことがしげられる。

大講堂の旧基壇には古くから枢要な堂宇が建っていた。主軸線を旧基壇、中門、現南大門の心々を結んだ直線とすると、旧南大門の位置がこの直線上にあると想定しうる。現南大門の北方には、西大門と東大門を結ぶ道がとおっている。この道は中宮寺のあった南の道に通じ、飛鳥白鳳期に新しくつくられた道である。⁽¹⁵⁾この道路と伽藍主軸がまじわる道路北側の線は、西辺が少し北へあがるので、周辺の道路北側の線よりもわずかに角度が東へ偏る。この直線をよくみると、主軸線と直交しているのがわかる。すなわち、この道路北側の線は伽藍配置と何らかの関連性が考えられ、伽藍前面の東西の道が飛鳥白鳳期のものなので、この道路の北側の線の

少し北にこそかつての旧南大門が位置していたと解釈できるのである。

さて、伽藍配置の概略がわかったところで、地割を検討してみよう。塔と金堂の心々を結んだ直線と主軸との交点を伽藍の中心点とし、試みにそこから回廊までの距離24mを半径としてコンパスで円を描いてみた。すると円が5個きわめて整然と並ぶことがわかった。回廊内の円について、弧は塔基壇の西端、ほぼ南北両隅をとる。東側の金堂については、基壇上に『資財帳』にもとづいて金堂の規模を記入すると、堂宇の東端、南北両隅と弧線が接する。回廊北側の円については、旧講堂の基壇がその中にはいり、『資財帳』記載の食堂の規模を記入すると、ほぼ北端の東西隅と接することがわかる。回廊南側の円の中に中門と旧南大門がすっぽりはいる。現南大門は旧南大門から円2個分はなれたところに平安後期に造営されたのであろう。

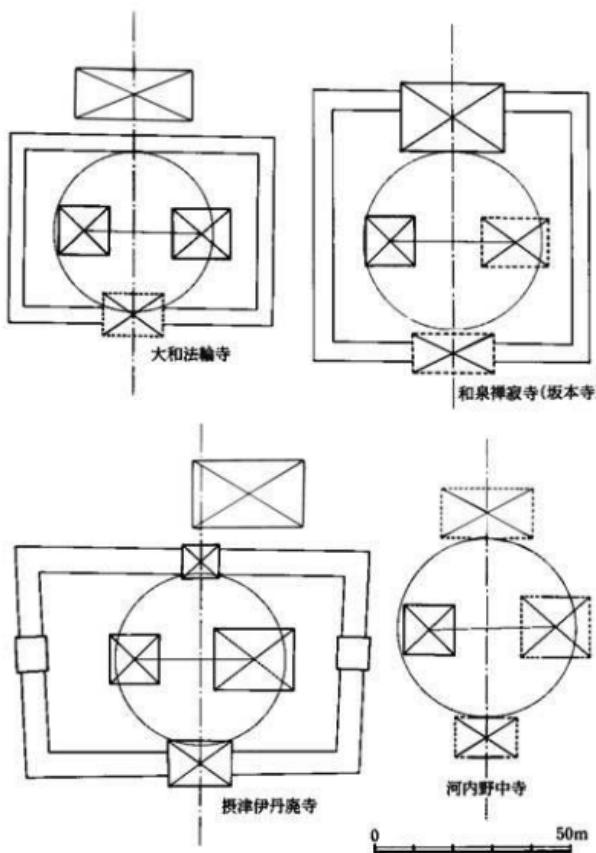
伽藍堂塔を布置するにあたり、塔と金堂をかこむ円が重要な役割を果たしたことは推して知るべしである。またこの円をもとにする伽藍配置はいわゆる法起寺式伽藍配置に類似し、金堂と塔を左右入れかえ、さらに北方へ講堂を備えた以外は変わりがない。伽藍堂塔の設置にあたり、まず半径24m(80尺)の円を3個描き、第1の円内に仏門、第2の円内に塔と金堂、第3の円内に講堂(食堂)を配したのである。

回廊、塔、金堂の軸は伽藍主軸と微妙に狂う。これらの堂塔の軸は西大門と東大門に通ずる道の軸とほぼ一致し、一方、主軸は現南大門前後の道と一致する。ところで、この両者の道はほぼ直交するので、軸相互間の時期差を見いだすことは困難であろう。

法隆寺西院の伽藍配置があらましわかったところで、法隆寺式伽藍配置と呼ばれている古代寺院を再検討してみよう。残念ながら古代寺院に関して堂塔の規模、伽藍配置までわかっている例は、国分寺をのぞいて非常に限られてしまう。それでも法隆寺式伽藍の古代寺院を数例あげることができた(第18図)。

法輪寺および伊丹庵寺は法隆寺西院と同様、塔と金堂のまわりを回廊がめぐり、その北方に講堂が存在する。禪寂寺は講堂が前進し、回廊が後面についている。法隆寺式伽藍配置に、法隆寺西院のようなタイプと禪寂寺等を例とするタイプの両者があるが、このことはすでに指摘^⑩されている。注目すべきことは、回廊であれ、講堂であれ、法隆寺西院伽藍配置地割想定でおこなったように伽藍中心地点からの距離でもって円をえがくと、ほぼ半径21~23mの円が描けることである。拡大縮少コピーの誤差をも考慮にいれると、この円の大きさはほぼ同一とみてよいであろう。この円の中に塔基壇と金堂の堂宇がはいり、その南に中門が位置する。かくして法隆寺式伽藍配置には、一定の規格性がうかがえるのである。なお、ここに図示した寺院は全て白鳳時代の寺院である。

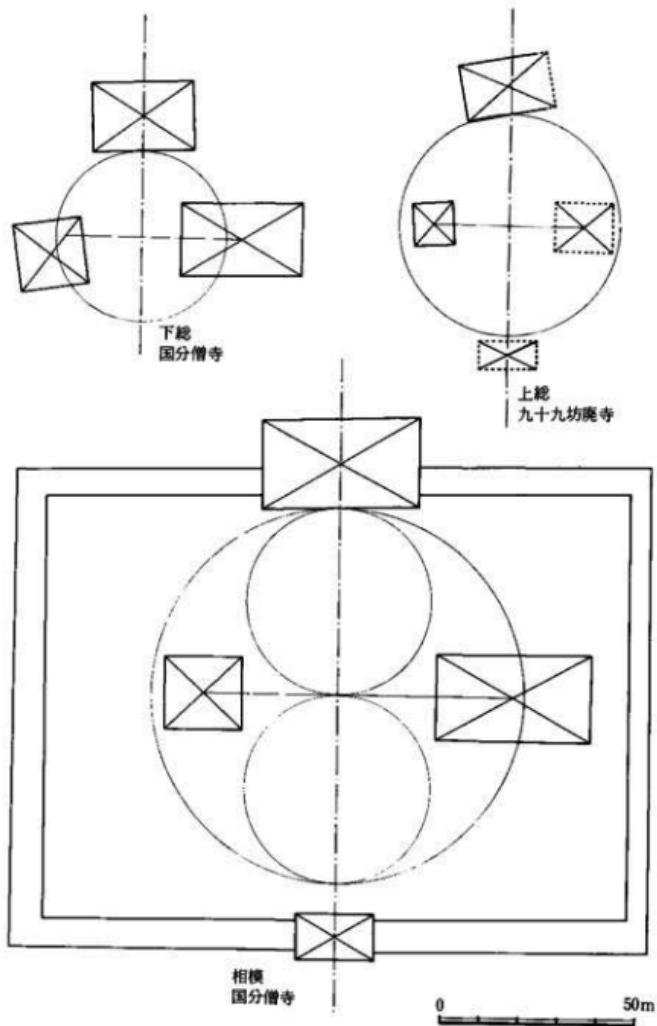
東国にも法隆寺式伽藍配置の古代寺院がある(第19図)。下総国分僧寺、上総九十九坊庵寺、相模国分僧寺が挙げられる。畿内周辺の法隆寺式伽藍配置に見られたような厳格な規格性



第18図 法隆寺式伽藍配置図（畿内周辺 1/1500）

をみせる伽藍はない。下総国分僧寺の伽藍内の範囲に半径22mの円を描くことができるが、この円内に金堂、塔はおさまらない。九十九坊庵寺の場合、塔が伽藍境内的の円の中にはいるが、円は半径約28mとなり、畿内周辺の法隆寺式伽藍の円よりも少し大きい。相模国分僧寺にいたっては伽藍境内がきわめて大きくなり、円を描くと、畿内周辺の法隆寺式伽藍の場合よりも半径が2倍になってしまふ。

東国の法隆寺式伽藍は、畿内周辺のものよりもさほど規格性がうかがえない。この相違の要因をどこにもとめたらよいのであろうか。それはともかく、九十九坊庵寺が畿内周辺の法隆寺式伽藍配置の規格と若干ちがうことは確実といえよう。



第19図 法隆寺式伽藍配置図（東国 1/1500）

法隆寺式伽藍の命名は高橋健自博士によってはじめてなされ、伽藍研究の先鞭をつけた。⁽¹⁾ そして後年、石田博士が古代寺院研究の集大成をおこなうこととなるのである。法隆寺式伽藍の淵源は大陸にもとめられた。四天王寺式が六朝、隋代のものから朝鮮をへて日本に渡來したのに⁽²⁾ 対し、法隆寺式は六朝から朝鮮をへて日本にきたとされた。中国河北省正定県開元寺も法隆寺

⁽⁵⁾ ⁽⁶⁾
式伽藍と伝えるが、さだかではない。

年代

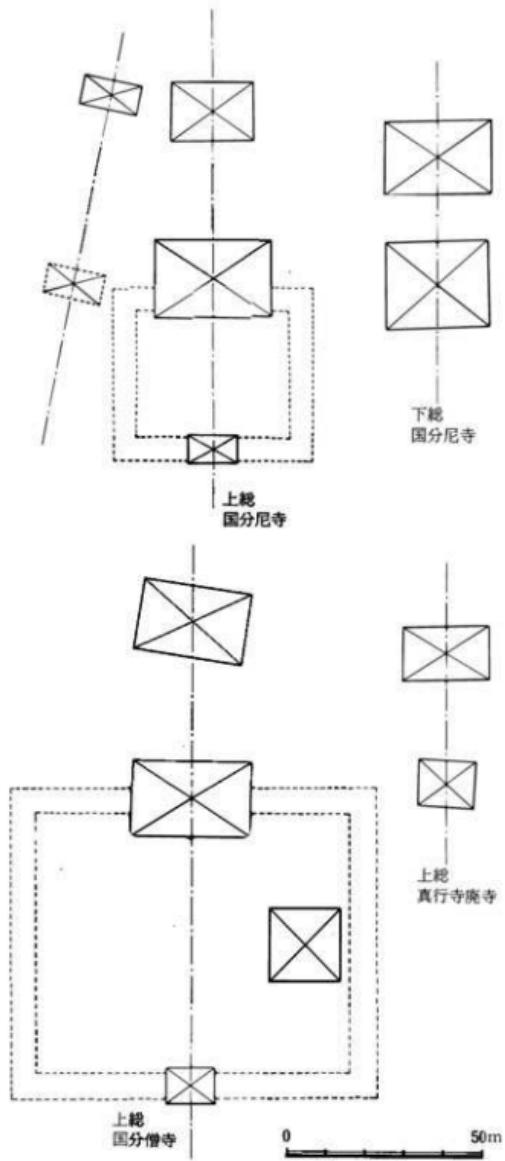
さて、九十九坊廃寺跡の年代についてであるが、年代を決める手掛りとなる土器が小片數点しかみつからなかったため、土器編年からの推察は如何ともしがたい。そこで大量に出土した古瓦および伽藍配置、堂塔の規模等でもって年代を推測するよりしかたがなかろう。

文様瓦には三重圓文縁四葉單弁蓮花文軒丸瓦と、段額三重弧文軒平瓦がある。この種の軒丸瓦は畿内周辺およびその他の地域においてもみかけない。類似した瓦が出土した寺院遺跡は、わずかに近隣に位置する市原市寺山の光善寺廃寺、千葉市大椎町の大椎廃寺の2ヶ所のみである。⁽⁷⁾ 戦前の報文では、この軒丸瓦を奈良朝中期から末期としている。段額三重弧文軒平瓦は国内各地から各種の軒丸瓦と組み合っている。単弁蓮花文と重弧文軒平瓦の組み合わせは畿内から東へ比較的おおく分布し、天智・天武朝のものである。また、天武朝には仏教政策が盛んに興ぜられ、第2波の造寺活動が全国的にみてとれた時期である。九十九坊廃寺、大椎廃寺の軒丸瓦をそれぞれ7世紀第4四半世紀と8世紀第1四半世紀とし、光善寺廃寺の軒丸瓦をその中間におくと、九十九坊廃寺の単弁蓮花文は天武朝期の造寺活動にともない新たに創案されたとも解釈できよう。

法隆寺伽藍配置は、畿内周辺では白鳳期とするものがおおいが、東国となると時期不明の寺院がおおい。相模國分僧寺、下総國分僧寺とも、國分寺とはいえ、天平13年の國分寺建立の詔勅によって創建されたとも、それ以前に一部の堂塔がすでにあったとも言われづけ、いまだに結着はついていない。東国での法隆寺式伽藍の年代はおさえがたいが、九十九坊廃寺の場合、畿内周辺の法隆寺伽藍配置の規格性とさほどくるいをみせていないので、極端な時期的ひらきを想定することは困難であろう。

東国にはいくつかの堂宇を配して伽藍を構成する寺院と、堂宇を1棟ないし2棟でもって構成される小規模な寺院がある。後者は近年注目されはじめた伽藍である。ところで、九十九坊廃寺の伽藍には複数の堂宇が配されているので、前者に属す房總地方の古代寺院をとりあげて検討してみよう（第20図）。

下総の竜角寺は関東でも最古の創建といわれる寺院である。塔跡と金堂跡が発掘調査され、法起寺式の伽藍配置とされている。塔基壇は1辺10.8mで、九十九坊廃寺の塔基壇よりわずかにおおきい。上総國分僧寺の塔基壇は1辺18mである。九十九坊廃寺講堂の基壇を南北15m、東西約30mと仮定すると、南北14m、東西約23mの真行寺廃寺の講堂とほぼ同規模である。しかして、真行寺廃寺の創建は8世紀初頭とされ、講堂の造営は金堂のそれよりも同時期かやや遅れ、上総國分尼寺の造営と密接な関連性がとりざたされている。いずれにせよ、真行寺廃寺は奈良時代以前、白鳳期に創建された郡寺といえよう。九十九坊廃寺の講堂基壇に敷かれてあった瓦



第20図 房総地方古代寺院伽藍配置図 (1/1500)

を創建時の瓦とすると、講堂造営以前に本瓦葺きの堂宇があったはずなので、寺院創建を講堂の造営にさかのぼると考えるのが妥当であろう。

ところで、九十九坊庵寺の造営に関連する古文書がいくつか残っていたらしい。1つは旧貞元村の春日神社の『春日大明神由緒』と題する古文書で

須恵（後周准）郡司自大化元年至承安三年迄之間

和銅二年郡司

從五位下藤原朝臣房前公、但在京都代官藤原安麿公

長保二年

郡司藤原頼春公

天仁中

郡司源義康公

仁平二年

長田四郎義宗公

仁安元年

千葉修理介氏郷公

と、記されていた。またもう一つの古文書がある。表紙に延宝九年辛酉五月吉日とあり、

和銅三年郡司安麿、周准郡南子安村後援台内、九十九房、鐘樓、五重之塔並宝鏡院塔を
建つ。和銅四年落飾す云々。
⁽⁵⁾

という記事があったという。実物をみていないので何ともいえないが、どれほど信憑性があるのか、疑問である。藤原朝臣房前は、不比等の第2子で北家の祖である。慶雲年間に從五位下となり、和銅2年に東海東山2道を巡察している。房前は後に太政大臣にまで昇格した。かかる人物が東国の郡司であるわけがない。藤原安麿なる人物が一体いかなる輩であるのか、皆目見当がつかない。しかし、その頃の当地の豪族であろうことは疑いえない。古文書記事の信憑性はさておき、九十九坊庵寺が当時の豪族の手により造営されたという傍証にはなるであろう。
⁽⁶⁾

郡司は大化2年の郡制設立とともに坐ったとされる官職で、養老令にいたると若干様相を異にし、整理されている。郡制は律令制下の地方統治の中核となるわけだが、郡制以前に評制の成立が考えられる。評制は旧来の族制的国造制から中央集権的官僚支配へと移行するための布石であった。地方統治制度の改廃にあたり、在地豪族の面目躍如たるさまが目に浮かぶ。
⁽⁷⁾

九十九坊庵寺址を8世紀最終末と紹介する概説書がある。この年代観は内藤氏の考察を踏襲したためだろうか。かつて文部省史蹟調査員上田三平氏は九十九坊庵寺を平安朝のものと断定し、篠崎四郎氏の嘲笑をかった。閑話休題。文様瓦、伽藍配置、堂塔の規模、その他諸般の状況を考慮すると、畢竟、九十九坊庵寺は7世紀末葉の白鳳期に創建された寺院といえよう。
⁽⁸⁾

廃絶された時期については、その昔、当地に無数の堂塔を配した巨刹があったという九十九坊廃寺址にまつわる伝説があることから、中世になってもひきつづき寺院が存命しつづけたのではあるまいかと予想した。ところが発掘調査中、そのような伝説を明確に証左しうる遺物、遺構は全くみあたらなかった。したがって、九十九坊廃寺は中世以前のある時期に止息し、そのまま荒廃と帰してしまったと考えられよう。そこでその廃絶となった時期であるが、これについてもはっきりとしたことはわからない。一応文様瓦が1型式しかないので、創建後比較的は早い時期に廃絶をむかえたとしておこう。

以上で九十九坊廃寺についての年代としておきたい。九十九坊廃寺に関する問題はまだ2、3ある。

九十九坊廃寺に供給された瓦を焼いた瓦窯は、木更津市大久保の牛ヶ作瓦窯跡と君津市中村の大鷲瓦窯跡がある。牛ヶ作瓦窯跡からは軒丸瓦の失敗作が出土し、現在久留里城址資料館に展示してある。大鷲瓦窯で焼かれた瓦は、木更津市大寺廃寺に多く供給されたと考えられたが、^⑩今回の発掘調査で出土した平瓦の中にも若干大鷲瓦窯のものが混入しているという。九十九坊廃寺と大寺廃寺との関連性から、周准郡と望陀郡の豪族との結びつきがうかがえないのでないが、まだはっきりとしたことはいえまい。

ここ数年来、君津都市文化財センターでは小糸川下流域の富津市二間塚地区で古墳の調査をおこなっている。^⑪この地域には、有名な割見塚古墳、唐尺でもって構築された石室を擁する森山塚古墳、新羅焼土器を副葬した野々間古墳等の終末期古墳が存在する。一連の終末期古墳は7世紀代の古墳とされ、最終末の森山塚古墳の築造は7世紀中葉頃である。九十九坊廃寺との時間的へだたりは数10年のみである。小糸川下流域の終末期古墳と九十九坊廃寺との対照は興味深いものである。小糸川下流域の終末期古墳につづく古代寺院は下流域に造営されず、約7km上流にさかのぼった地点につくられ、そこには寺院にさきだつ終末期古墳がみあたらぬ。昨年、君津都市文化財センターでは、割見塚古墳の発掘調査をおこない、その報告が近々刊行される予定である。この報告が世に出れば、九十九坊廃寺址と小糸川下流域の終末期古墳との連関がさらに一層はっきりとするであろう。

九十九坊廃寺址の西南、小糸川をはさんだ対岸にかつての周准郡の郡衙跡があつたとされている。^⑫この距離からすると、九十九坊廃寺と周准郡衙との密接な関係が想起され、あわせて小糸川下流域の終末期古墳との関係をも対比してみるとならば、この地域における古代豪族の動向について、種々の問題が提議されるようである。

今年度の報告はこのあたりで止めておく。残された課題は次年度の調査担当者の任に託す。

註

- (1) 「類聚三代格」卷第三 「国史大系」本前篇、P. 107
- (2) 「百万塔」『古事類苑』宗教部三、P. 102
- (3) 内藤政恒・大場磐雄・篠崎四郎「上総國九十九坊廃寺跡調査報告」「史蹟名勝天然紀念物」第9集第9号 1934年9月、P. 703
- (4) 石田茂作「塔の中心礎石の研究」1932年『佛教考古学論攷』4 思文閣、P. 204 参照
- (5) 石田茂作(註4) P. 219
- (6) 内藤政恒氏は戦前の論文で、1辺長18尺、心礎柱径1.6尺として計算している。(註3) P. 714
- (7) 岩井隆次「日本木造塔跡」考古学選書20 雄山閣 1982年、P. 94~8
- (8) 石田茂作「飛鳥時代の寺院に就いて」1925年『佛教考古学論攷』1 思文閣、P. 48
- (9) 稲垣普也「日本各地の寺院跡 近畿」『佛教考古学講座』第2巻 雄山閣 1975年、P. 99, 104
- (10) 内藤政恒(註3) P. 716
- (11) 石田茂作「飛鳥時代寺院址の研究 総説」1944年、復刻版、P. 79~80
- (12) 鈴木嘉吉「埋もれた寺院」『世界考古学大系4 日本IV』平凡社 1961年、P. 35
- (13) 浅野清「法隆寺建築の研究」中央公論美術出版 1983年
- (14) 前園美知雄「法隆寺境内」『奈良県遺跡調査概報 1980年度』第2分冊 1982年、P. 231~250, 「法隆寺発掘調査概報I」法隆寺 1982年
- (15) 作図にあたって「法隆寺出土古瓦の研究」奈良県史蹟名勝天然紀念物調査会報告第9回 1962年、石田茂作「飛鳥時代寺院址の研究」1936年、復刻版P. 157~160、図版90 および(註12)~(註14)を資料とした。
- (16) 「法隆寺伽藍縁起井流記資財帳」『寧楽遺文』中巻、P. 361
- (17) 喜田貞吉「法隆寺伽藍の謎」1937年『喜田貞吉著作集』7 平凡社、P. 277~9
- (18) 西岡常一・宮上茂隆「法隆寺」草思社 1980年、P. 9
- (19) 法輪寺:町田甲一「法輪寺の歴史」「大和古寺大観」第1巻 岩波書店 1977年、P. 30~1, 鈴木嘉吉「斑鳩古塔の発掘と修理」「日本歴史」第297号 1973年2月、P. 129~130
禅寂寺:石田茂作(註15) P. 487~490、図版249, 「禅寂寺(坂本寺)跡調査概要」大阪府文化財調査概要 1966年
伊丹庵寺:『攝津伊丹庵寺跡』伊丹市教育委員会 1966年
野中寺:石田茂作(註15) P. 441~3、図版226, 石田博士の伽藍想定を一部変更した。
- (20) 浅野清「寺院遺跡」「佛教藝術」80号 1971年6月、P. 104

- (21) 下総国分僧寺：「下総国分寺址」市川市教育委員会 1968年、滝口宏『武藏国分尼寺』早稲田大学出版部 1978年、P. 51~54
- 相模国分僧寺：赤星直忠「相模国分寺」「国分寺の研究」上 考古学研究会 1938年、P. 650、岡田茂弘「相模国分寺を掘る」『古美術』18 1967年7月、P. 65~72
- (22) 高橋健自「古刹の遺址」『考古界』第4篇第3号 1904年9月、P. 157
- (23) 坂詰秀一「学史上における高橋健自の業績」『日本考古学選集』9 築地書館 1971年、P. 10~11
- (24) 石田茂作（註11）P. 93
- (25) 桃井清彦「歴史時代」『考古学ノート』5 日本評論新社 1958年、P. 45
- (26) この方面の研究として、坂詰秀一「歴史考古学研究」II ニューサイエンス社 所収の数篇の論文を参照。また大陸関係としては、村田治郎「中国伽藍配置の溯源」『仏教芸術』16 1952年8月、P. 60~70、同「中国の初期伽藍配置」『日本歴史考古学論叢』吉川弘文館 1966年、P. 405~428、等の論文がある。
- 近年、大陸でも建築史に関する概説書が2、3出版され、論文も多いようであるが、伽藍配置関連の言及は僅少である。
- (27) この軒丸瓦の単弁を復弁とする識者がいる。「房総の古瓦」房総風土記の丘展示図録No 4、1978年、P. 39、「千葉県の文化財」千葉県教育委員会 1980年 P. 408、阪田正一「九十九坊廃寺跡」『千葉県大百科事典』千葉日報社 1982年、P. 253、しかし、やはりこの瓦の文様は復弁ではなく単弁とみるべきであろう。
- (28) 内藤政恒（註3）P. 719
- (29) 稲垣晋也「飛鳥白鳳の古瓦」「飛鳥白鳳の古瓦」奈良国立博物館 総刷版1982年、P. 335~6, 341
- (30) 須田勉「古代地方豪族と造寺活動」『古代探叢』早稲田大学出版部 1980年、P. 451
- (31) 大場磐雄「相模国分寺の性格」1951年『大場磐雄著作集』第4巻 雄山閣、P. 16~27、滝口宏「国分寺造立の発詔」『市川市史』第2巻 吉川弘文館 1974年、P. 126~133
- (32) 坂詰秀一「関東」『仏教考古学講座』第2巻 雄山閣 1975年、P. 174
- (33) 上総国分僧寺：滝口宏「上総国分僧寺」千葉県教育委員会 1973年、「上総国分僧寺跡」上総国分寺台発掘調査概要Ⅸ 1982年
- 上総国分尼寺：宮本敬一「上総国分尼寺跡北辺部の調査」「南向原」上総国分寺台遺跡調査団 1976年、P. 144~159、同「上総国分尼寺跡の調査」「上総国分寺台発掘調査概報Ⅶ」上総国分寺台遺跡調査団 1980年 P. 21~44
- 下総国分尼寺：「下総国分尼寺跡II」市川市立考古博物館 1984年 P. 32

- 真行寺廃寺：『成東町真行寺廃寺跡研究調査報告』千葉県文化財センター 1984年
- (30) 滝口宏『下総龍角寺調査報告』千葉県教育委員会 1972年、P. 7
- (35) 小熊吉蔵「文献上より見たる上総九十九坊廃寺跡」「史蹟九十九坊廃寺跡」千葉県君津郡君津町 1955年、P. 23
- (36) 「藤原朝臣房前」「日本古代人名辞典」第6巻 吉川弘文館 1973年、P. 1545～7
- (37) 『日本書紀』卷25 「国史体系」本後篇、P. 225
- (38) 『令義解』卷1 「国史体系」本、P. 62～3
- (39) 米田雄介『郡司の研究』法政大学出版局 1976年、P. 113～122, 162～6
- (40) 千葉県教育委員会（註27）P. 408, なお『千葉県記念物実態調査報告書I』千葉県教育庁文化課 1980年、P. 37では8世紀後半としている。
- (41) 内藤政恒（註3）P. 719
- (42) 篠崎四郎「上総国九十九坊廃寺跡」「房総郷土研究」第1巻第10号 1934年9月、復刻版 P. 114
- (43) 須田勉氏の御教示による。
- (44) 宮本敬一氏の御教示による。
- (45) 『二間塚遺跡群確認調査報告書』君津郡市文化財センター発掘調査報告書第5集 1984年
- (46) 原田道雄「横穴式複室に関する覚え書き」「史館」第3号 1974年11月、P. 72～3, 85, 「森山塚」国学院大学文学部考古学実習報告書第7集 1984年、P. 54～9,
- 石井則孝「千葉県富津市出土の新羅焼土器」「史館」第8号 1977年3月、P. 74～6, 同「富津市上飯野「野々間古墳」の出土遺物」「史館」第10号 1978年5月、P. 54～5
- (47) 小熊吉蔵「千葉県に於ける郡家の遺跡（其一）」「史蹟名勝天然紀念物調査」第12輯 千葉県 1935年、P. 41～5

写 真 図 版



九十九坊廃寺跡講堂写真 昭和42年撮影 株式会社京葉測量提供

1. 塔発掘前
(北東から)



2. 塔発掘区
(北から)

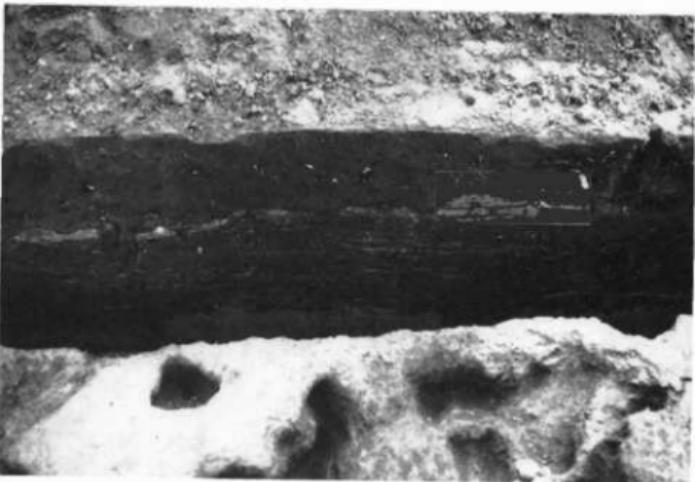


3. 塔心礎
(西から)





1. 塔東側基壇土層
断面図(東から)



2. 塔東側基壇土層
断面図(部分)



3. 講堂発掘前
(北から)

1. 講堂基壇
(中央)



2. 講堂基壇
瓦敷き



3. 講堂基壇
(北)



1. 講堂基壇
(西)



2. 講堂基壇
(南辺)



3. 講堂南寄り
瓦出土状態

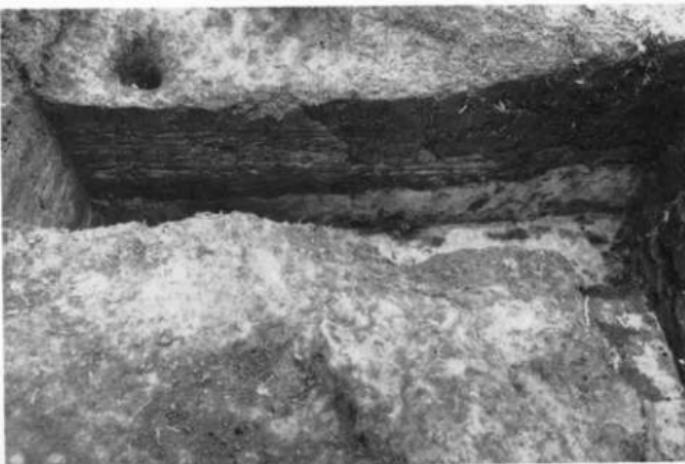




1. 講堂東寄り
瓦出土状態



2. 講堂基壇
北辺土層断面



3. 講堂基壇
西辺土層断面

1. 講堂西側掘立
建物群
(南西より)



2. 講堂西側掘立
建物群
(西南より)



3. 北西部掘立柱



軒丸瓦
(1 : 3)



1



2



3

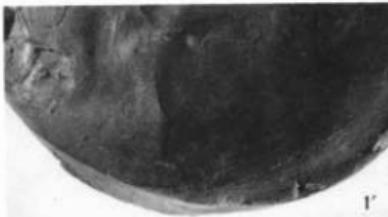


4

製作手法



1



2

瓦当部裏面
1(4), 1'(1)



2



2'

瓦当細部
2(2), 2'(2)



3

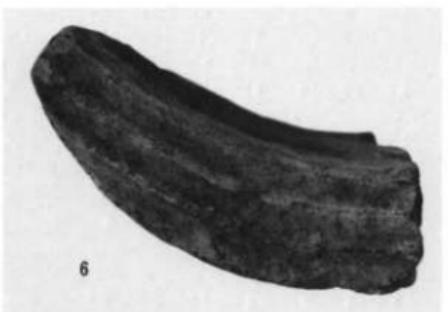


瓦当面細部
3(4), 3'(3)

軒平瓦
(1:2)



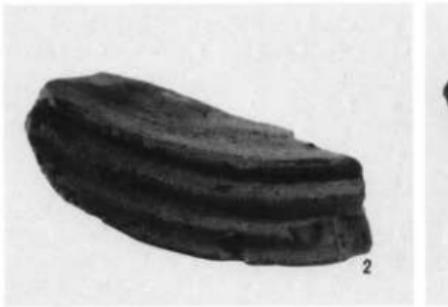
1



6



5



2



3

製作手法

額部断面
1(5)



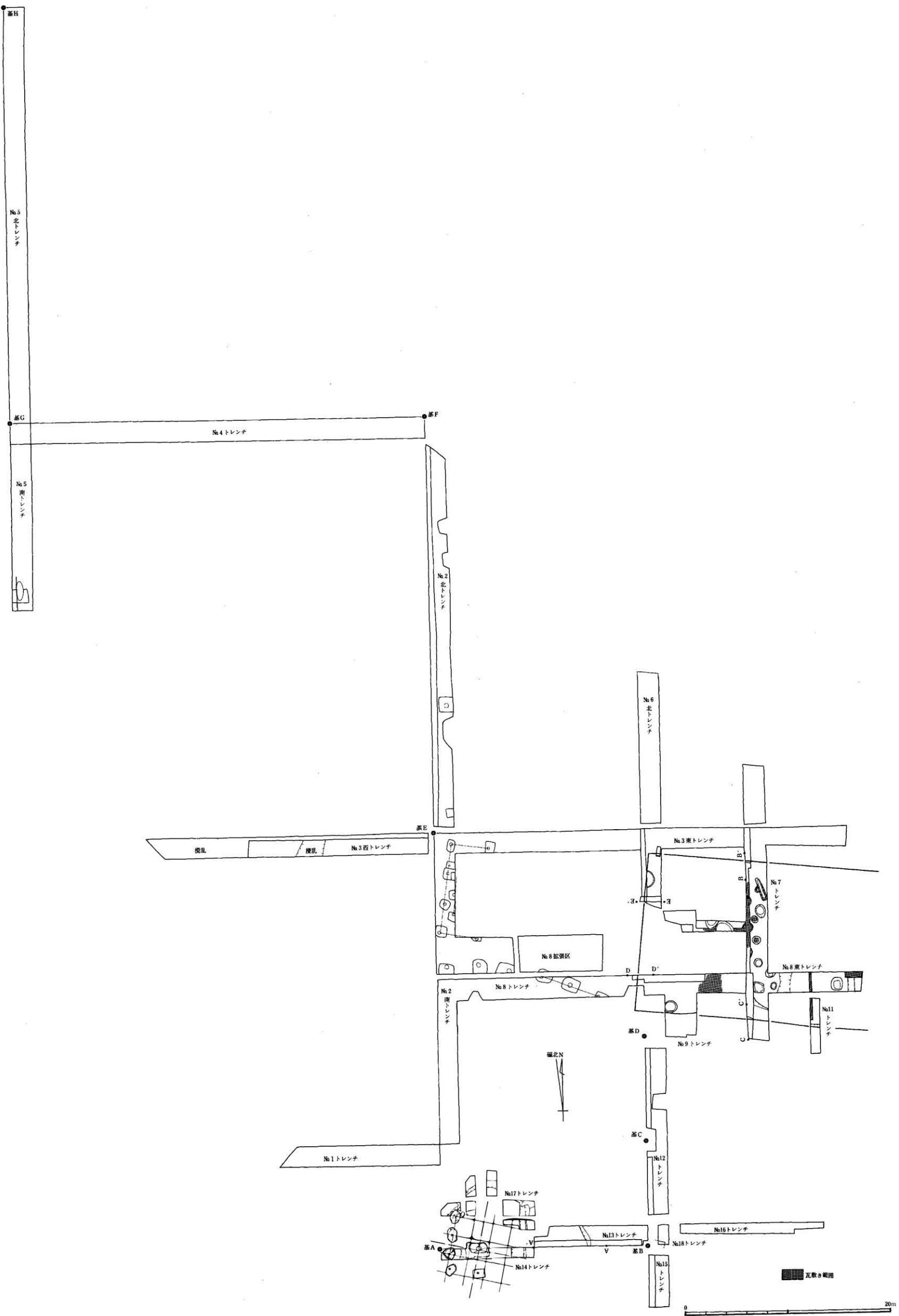
2(4), 2'(1), 2''(6)



2



2'



付図 九十九坊庵寺全測図 (1/200)

君津市九十九坊廃寺址確認調査報告

昭和60年3月30日発行

発 行 者 財団法人 千葉県文化財センター
編 集 者 千葉市葛城2-10-1
電話 千葉(0472)25-6478

印 刷 所

弘 文 社
市川市市川南一7-2
電話 (0473) 24-5977
